

特261-535



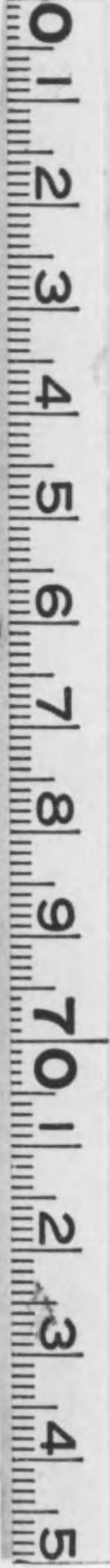
1200600364231

335
74

庚午日記

山崎如春

表



始



小島家著

巻二

庚午日記

二の巻



庚

午

日

記

三

卷

陽曆五月
廿三日
禮拜日
五月十日
禮拜日

月
日
夜
者



特261
535



月の家 著

庚午

日記

三の巻

昭和五年

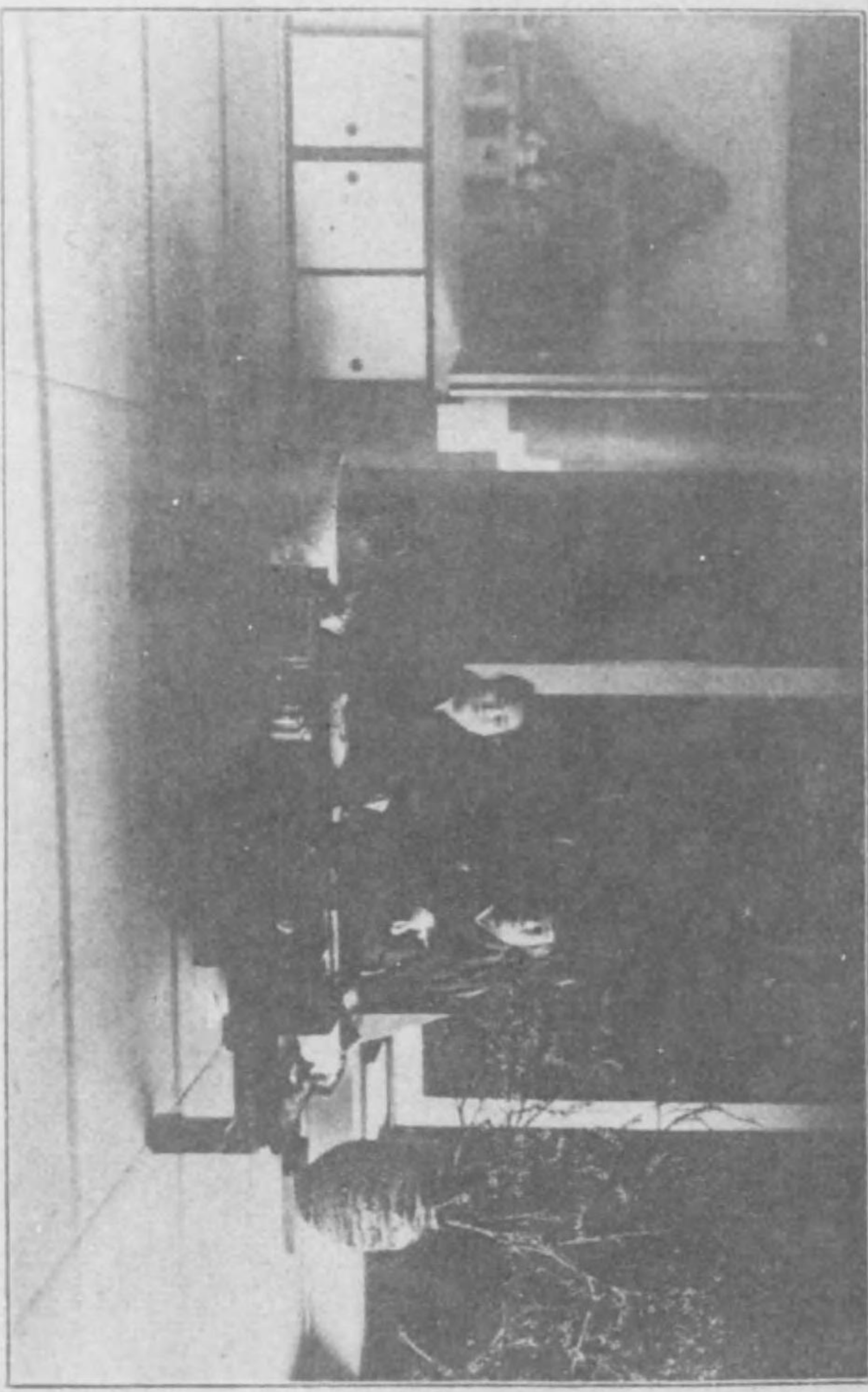
自三月十四日
至四月五日



日本の経済

太平洋の諸島

南洋群島
南洋群島
南洋群島
南洋群島
南洋群島



禮堂の組間はたれき器安に上床左 主教代こと(春著)神聖山出
(て於に開天啓しせ成鏡日二月四)



出 聖 伽 作 樂 像

庚午日記 三の卷 目次

昭和五年三月

十四日	於	月	光	閣	一頁
十五日	於	教主殿及高天閣			九
十六日	於	宗教博覽會大本館			二三
十七日	於	高天閣			三〇
十八日	於	高天閣			四二
十九日	於	大本農園瑞雲閣及高天閣			五一

目次を はり	五	四	三	二	一	卅	卅
	日	日	日	日	日	日	日
	於	於	於	於	於	於	於
	高	高	穹	穹	穹	高	高
	天	天	天	天	天	天	天
	閣	閣	閣	閣	閣	閣	閣

	二八二	二七〇	二五三	二四一	二二六	二一一	一七四

廿九	廿八	廿七	廿六	廿五	廿四	廿三	廿二	廿一	廿
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
於	於	於	於	於	於	於	於	於	於
高	高	高	教	教	教	高	於	高	高
天	天	天	主	主	主	天	於	天	天
閣	閣	閣	殿	殿	殿	閣	閣	閣	閣
.....
一六九	一六二	一五五	一五二	一四一	一三〇	一二四	一〇〇	七六	六二

庚午日記 三の巻

昭和五年三月十四日

於月光閣

月光閣起き出で見れば午前九時二階の窓に春陽照り映ゆ
暖かき今日の一日は始めての春に逢ひたる心地せしかな
繪筆持ちて昨夜來たりし満月は梅田方より歸りて侍らふ
正午より尺五絹本八枚を筆染め終へぬ月光閣にて
満月は銅版事業の忙しさに急ぎ龜岡さして歸れり

黄昏れて本宮山に近侍等と登りて穹天閣に上りぬ
 十五夜の月は黄金に映え乍ら味方富士の尾上り初めたり
 裏道を辿りて一行彌勒殿月並祭の禮拜を爲しぬ
 神苑に響く祝詞の諸聲に天地新たに開く心地す
 十五夜の月は限なく大空にさえて神苑殿かなるかな
 今日も亦軽き疲れを覚えつ、月の神苑さまよひて見し
 月清く御空に照りて大前の祝詞の聲もさえ渡るなり
 大本の表入口百餘坪いよく買入る、事に決せり

○ 宗教大博覽會大本特設館より

三月十四日 (第七日)

昨夜からの生暖かさも曉方になると春寒を覚えて碧空が覗く。
 まだ七時半といふに百名近くの團体が繰り込んで出勤早々の看守さん目をまはしてゐる。
 書籍販賣部の棚の一方が少し引込んで出口の間際あたりに 杉が四五本植ゑられてよほど取
 りつきがよくなる。花壇にも杉が数本植ゑられて花が一層引き立つて見える。
 團体に續く團体、又團体、館内人の山、人の波。宇知磨様から館内一同へお餅を下さる。
 京都分所四方氏、本支部上田氏の手によつて本日迄に入場券が二千枚捌けた。
 午前中の入場者二千百名。本日迄のレコード。——猶本日の午前は知恩院で管長以下三千
 の僧侶の行列があるとかで、午後になればそれを終つた團体が殺到するだらうとの噂。
 事實だ、午後になると來るわ、來るわ、百、二百、三百、五百、係員も身動きが出来ない
 有様。

樂燒部は相變らずの繁昌、佐々木青年の額からは流汗淋漓、澄月、崎月兩女の手が日まぐ
るしく動いて『お待遠様』——包みが渡される。大切相にかゝへて行く。

櫻の咲きさうな陽氣に、團体以外の出足もそゝつて三時には早六千餘を數へ、看守のお嬢
さん達、ホーツと上氣してゐる。

靈界物語の購入が例日に比して多かつた。靈界物語 關係の出品に刺戟されたものらしい
——坊さんが祭式の本を買つたとは面白い——矢張り手輕なせいだらう『大本の話』が一番
よく賣れる、『愛善の世界へ』も大分出る。

▲観客とりにく

一、聖師筆子手觀音の大幅にお題目をあげる人が澤山ある。

一、館内へ二三歩。左手に明るき花園——『極樂ですなア』とつれを顧みるお婆さん、電
氣點滅をみて『極樂だ、光り輝いてゐる』といふお爺さん。這入つて出る迄極樂の連發
事實、大本館が極樂——天國館でござい——だ。

一、『出口さんといふ方はまだ生きて居られますか』との質問が日に幾つとなくあるとはこ
れ迄どう思つてゐたものか。

一、三重縣からの四五人連の内の一人。『自分は以前友人平松氏をたづねて龜岡へ行き道場で
一度講演を聞いたが、その時は別に何とも思はなかつた。今日こゝへ来ていよ／＼平松
氏に降参し服従せなければならぬのを覺つた。午後早速龜岡へ行く』と打連れて足も輕
げに立去つた。

一、同志社大學生の一人海外發展狀態の地圖の前まで来て快聲をあげる。『こいつ面白い。
大本教は世界一だ』——直ぐ様書籍販賣部に取つて返し『靈主体從子の巻』『英文 大本』
『宇宙一月號』を購入し館内を三度巡つて快く立去つた。 (松村宣子)

◇三月十四日 中外日報所載記事

▲大本教の山内勇二氏が來訪された砌、宗教博の大本館の新味に就いて語る
▲「三千世界一度に開く梅の花」といふ教祖の一行ものは之を玄關口へ出した方が一層の明るさを添へないかと告げた。

◇三月十四日 北國夕刊新聞所載記事

天國に生る途……は

山代町の愛善講演會

人類最大の幸福であり相互の愛善並に宗教から見た現在觀、未來觀などを解剖して人道愛に活きんとする者の爲めに斯界の權威法學士土井大靖氏を煩はし十一日午後七時から山代温泉はたや旅館に於て一場の講演會が開かれた。參聽者約七十名にして氏の熱心なる思想、宗教などに關し日頃の蘊蓄を傾けて解き去り解き來り、更に論旨を進めて最後に我々神國に生きる民族は絶對に神の教に非ざれば絶大の幸福を齎すべきに非ずと喝破し滔々四時間に亘る

大講演を終り、各自に多大の暗示、感銘を與へ盛況裡に十二時散會した。此日室内には出口總裁の書畫並に諸種の製品を陳列して一般人士の參考に供して非常の賞讃を博した。

◇三月十四日 大阪今日新聞所載記事

春の京都に

宗教大博覽會

各宗各派が競つて大宣傳

國民精神振興に大裨益

京都は千年以來の我國の帝都であつた舊都であつて宗教、美術の淵藪地として國民精神に甚大なる關係あると共に日本歴史上永久に忘れ得ない處である。更に近代文化の向上は山河襟帶、四隣の風物と相俟つて眞に遊覽都市として日本帝國の誇りであるが、時は春、三月十日より知恩院に於ては高祖善導大師の一千二百五十年を初め關原寺、東福寺、本國寺に於てもそれ／＼大

遠忌を嚴修され入洛の信徒、群衆の好機に際會せるのみならず、其他各宗本山も各門戸を開き新興宗教たる大本教、天理教等の本部も亦接近せる此地に於て開催されたゞけに殊に同會は京都市の後援を得て三月八日より五月六日まで宗教大博覽會を岡崎公園及び知恩院境内に開催し國民精神の作興と産業の進展とに貢献する所あらん事を期して開會したもので、第一會場は京都岡崎公園、第二會場は知恩院境内である。第一會場入口は羅馬の寺院建築によつた壯大な門であるが、會場入口左手は大本館で、大本教は五萬圓を投じて特設館を建築し出口師の書畫詩歌一千餘點を開陳せる外、開祖の御筆先や大本教の沿革、海外宣傳の情勢、綾部龜岡模型、大本の教、大本明光社の藝術運動、人類愛善運動、大本明光社樂燒、大本書籍の販賣などをしてをり此の博覽會開期中は綾部龜岡とも神苑開放、拜觀隨意とする由、その他各宗とも盛んに出品してゐるが、第二宗教館には電氣照明の地獄極樂、魔の墓所、不思議な藪などの奇怪の光景を實現してあるのみならず、キリスト教にては岡山聖盧畫伯の篤志提供による日本最初の殉教者二十六名の畫や、各宗派の高僧達の聖畫はみな各本部より門外不出のものを提供してゐる外、佛教各派は勿論、神道各派も各傳導師を派して連日大説教をしてゐるが、殊に大本教の如きは場内に高さ三十三尺、内廊六十間の特設館を建て、ゐるなど特記すべ

きものである。また餘興にも最も注意を拂ひ現代社會の娛樂心裡に迎合すべく撰擇し、之に同會の主旨を加味したる活動寫眞、演劇、郷土藝術の紹介、その他清新なる娛樂を興行し、尙ほ特別餘興場としては京都市公會堂及び華頂會館を使用して時々特別大餘興を行ふと、尙ほ十五日午前十時より市公會堂にて開會式を行ふ由。

三月十五日 於 天主教 閣殿

恭親王最高顧問小澤光義、同親王府顧問吉村喜介、柴原源太郎、清水建雄
 (先日面會)の諸氏來訪、教主殿にて面會を爲し、滿蒙に關する宗教的談話を

爲して分袂、龜岡にて本日再會を約せり。

家鶏の聲さやかに神苑きよもして風も清けく朝日かゞやく
花は未だ咲かねき今日は何となく春の彌生の心地せらる、
理學博士三好久太郎氏宣傳使授命の禮を述べて歸れり
午後の二時自動車二臺に分乗し綾部の驛をさして急げり
午後の二時三十六分發汽車に二代と共に安くのり込む
一本木踏切りあたり宣信徒數多出迎へ吾汽車見送る
小雲川流れ清けく伊根の山水底すかして影寫しけり
山家驛和知や下山胡麻越えて早くも殿田の驛に出でたり

梅の花匂ふ園部の驛こえて入木を巡れば高臺目に入る
法城は午後の夕陽にかゞやきて南桑の野を照らし望めり
龜岡の驛に下れば涅槃會に詣でし人にてブラット埋めり
本日支那道院紅十字會より梁慈果、周根淨、夏穎誠、李天真、王承宴、劉承
中、侯又誠、唐定敏の一行八名、神戸道院に安着の報あり、井上總裁大本を代
表して出張せり。

○大畫揮毫に就て

前代未聞の水墨大連磨を描きたる体験。
一、調子の外れる事は意外の意外甚し。

二、肉細なれば貧弱に見ゆ。

三、肉太にても矢張り貧弱を感じる。

四、一筆描きの本意として一線一點にても在つて好し無くて好しと見るべき無用の筆は一筆描としての働きの眞諦なし。

茲に於て一筆描無二の大作品としては實に体験家以外に到底判るものにあらざるを斷言して憚らず、又假に試みたる畫師のあるべきも容易に成功し得ざりしなるべし。之を貧弱に流れず權威ある剛健作に近づかんには、

○第一全身の氣合を固め線を引くに一分刻み毎に腕の力を押し込む事。

○急轉直下脱兎の氣合なるべき事。

○腕で描くと云ふよりも體力にて描く事。

○殊に開眼の一點はカハセミの魚をねらつて飛び込む時の氣分を要す、一投擲の眞諦この邊に存するなり。

○如何に肉太の筆を用ふるも只の勇氣は紙上に上走り、決して剛健の力と權威は紙上に躍如たらず。

要は一刀良めを刺す場合の意氣と氣合を必要とす。

快心の作に近づきて苦心休得上茲に告白するものなり。

以上

○夕さりて月光寮に出席し一筆達磨大壁紙二枚描きたり。

○大本教旨

○至聖大賢斯民の稱ふる所神眼之を視る未だ全美を盡さず、況んや其他に於ておや、故に先哲の靈後人の魂を守る能はざるは必定也。

○省耻悔畏覺の五情靈魂中に含有す、乃ち神明の戒律なり、末世譏無く妄りに戒律を作り後學を眩惑す、實に神府の罪奴と謂ふ可し。

○上帝一靈四魂を以て心を造り、之を活物に賦す、地主三元八力を以て体を造り之を萬有に與ふ。故に其靈を守る者は其体、其体を守る者は其靈、他神有りて之を守るに非ざる也。是即ち神府の命永遠不易なり。

○靈主体從善を爲すの本。体主靈從惡を爲すの始めなり。故に曰ふ善は天下公共に所し惡は一人の私有に所す。正心徳行は善なり、不正無行は惡なり。均しく是神子其相違き雲泥の如し。然らば是夫れ誰が過ぞ。

○人皆以爲らく審判は死後にありて賞罰は生前に非ずと、故に生に輕んじ死を重んず、是則ち神誅を蒙るの源、天獄に繋がるの因なり、神眼赫々固より幽顯無く生死理を一にす。何んぞ之を二となさんや。

○天主一物を創造するや悉く力徳に因る、故に善惡相混じ美醜互に交はる。

○

十六夜の月は限なく冴え渡り清しく見ゆる傑生の森
小夜更けて洗心亭の湯に入れば脂の臭氣鼻を突きたり
苑内を限なく巡り月ほむるすき間をイチ(犬)に飛び付かれけり

○武藏國松山局比企支部よりの來電

『只今展覽會終る、一日聖展一〇九〇、二日風雨強し五五〇、觀覽者ありたり』

右の外本日迄に展覽會の狀況電報ありたれども何れも省略せり。

○

佛々と小言夕べの古狸坊主に化けて木魚ボン

○木村庄太郎氏よりの來信 (三月十日附)

拜啓昨日は倉卒の際とて誠に御無禮仕候、あれから佛教、キリスト教各派の陳列を見、知恩院の内陣を拜觀歸宅仕り候。各派共未だ陳列十分整備致し居らず候處へ大本教のみは殆んど完成し居り、殊に新興宗教としての力強き配列方遺憾なく表れ居り、他の既成宗教に比し海外布教の有様、現在に於ける同教の地位等を表はす仕方等一段と徹底致し居り、誠に同派大車輪の御努力の程相見え申候。他のものは過去を示し、大本教は現在を如實に語り居候處に觀者の心を引くもの有之候。

別しては出口總裁の多藝多能、萬事に於て大衆に勝れたる御器量人と相察し、流石一宗を創立さるゝ丈けの御人なりと存じ上候。古の釋迦・キリスト、我國にては弘法、日蓮等の諸大聖も亦斯の如く在りし事と存ぜられ申候。時に古今の差あり、宣傳に今昔の相違ある可けれども、等しく一宗を創立する事の大事業たるは洋の東西と時の古今とを問はず同様誠に至難の事と存じ候。宗教に國境なし、今後大本の益々發展され世界的と成る事、彼の佛教、キリスト教に比す可きものある事を察知し得たる様に思はれ申候。博覽會見物後

の所感の一端に御座候也。

拜具

追而大本教の教育事業の有無を見のがし申候。

○ 宗教大博覽會大本持設館より

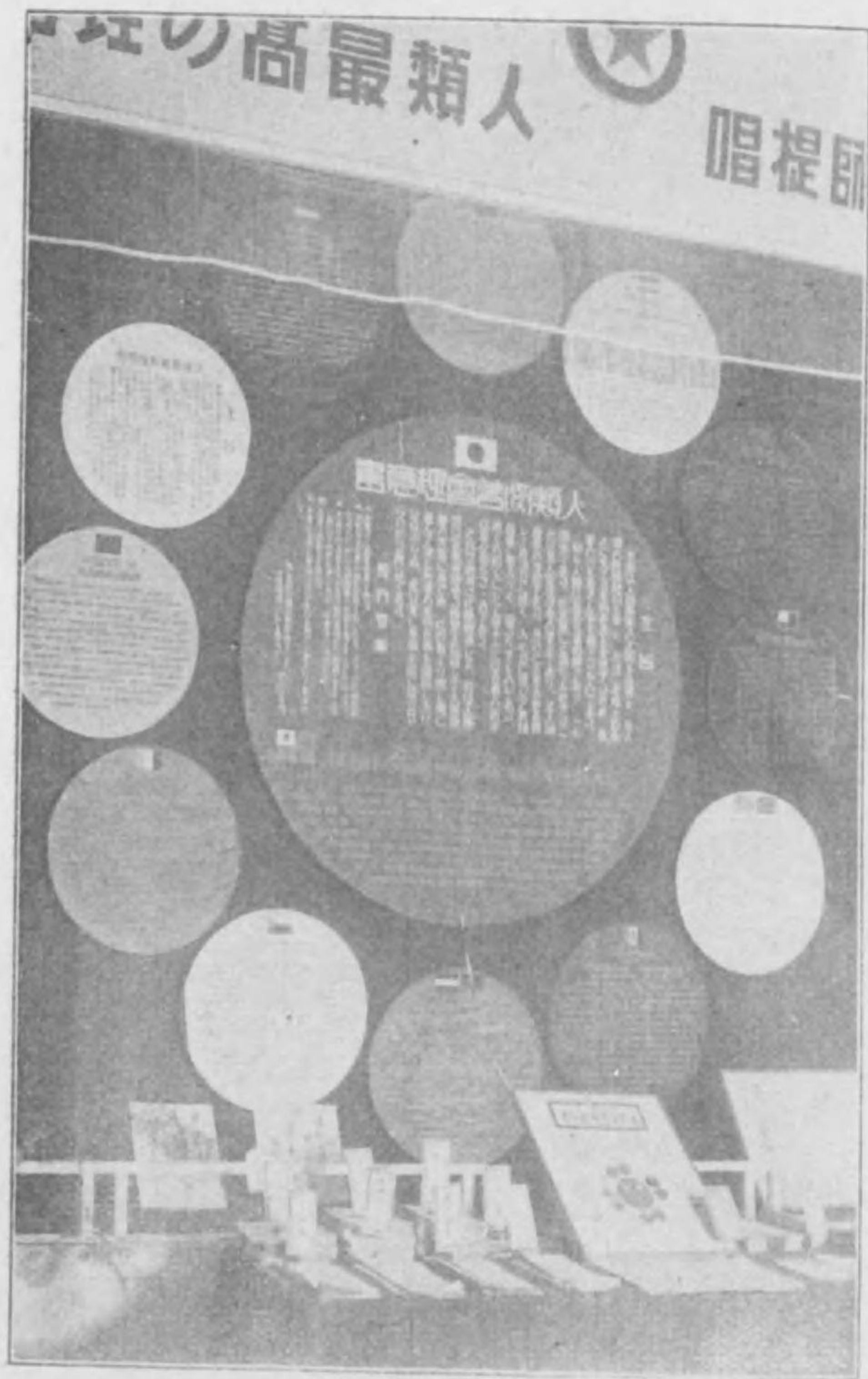
三月十五日 (第八日)

未明の大雨は去つたけれど雲行きが頗る怪しい。

おさだまりの様に、まだ門衛の立たぬうちから團體がやつて来る。開館直後は入場者の無いのが博覽會の常であるが、この宗博ばかりは時として七時前に来る人がある位だからこれだけでも毛色が變つてゐる譯。

相も變らず團體の入場が大半であるが、十五日のせいであらう、勤め人らしい姿を多く見受ける。

御神座前のはづれに兩袖が出来て大本格言が掲げられた。



宗博大本館(五共)愛善運動部の

右側。

人間の意志想念は老いて倍々盛也。

意志想念の存する限り、死後の生活は必ずあるものと信ず可し。

左側。

人間の眞の生命は顯幽を通じて不老不死也、現實界に於ては絶對の善もなく絶對の惡もなし。

本日は開會式の日。威勢よく煙火が揚がる。

徳島縣機支部から「イギフカキケフノカイカンヲシユクス」との祝電来る。

宇知廣様、井上總裁、御田村、岩田兩會長補、湯川總務、櫻井宣傳課長、北村輯編課長、

吉原天聲社長補、愛善新聞社萩原敏明氏、神本地方課次長等開會式に列する爲來館。

午前十時より開會式舉行。上記の外大國主事、中村(純也)會計主任、中村(良春)庶務

主任、神谷裝飾主任列席。

午前中の入場者千七百名。

北國夕刊社長補土井三郎氏來館。

午後になると開會式を終へた人達が見うけられる。

淺井生峰、三雲暉江、小龜ため子三氏の手によつて館内の生花が新にされる。

午後四時、七千百名。

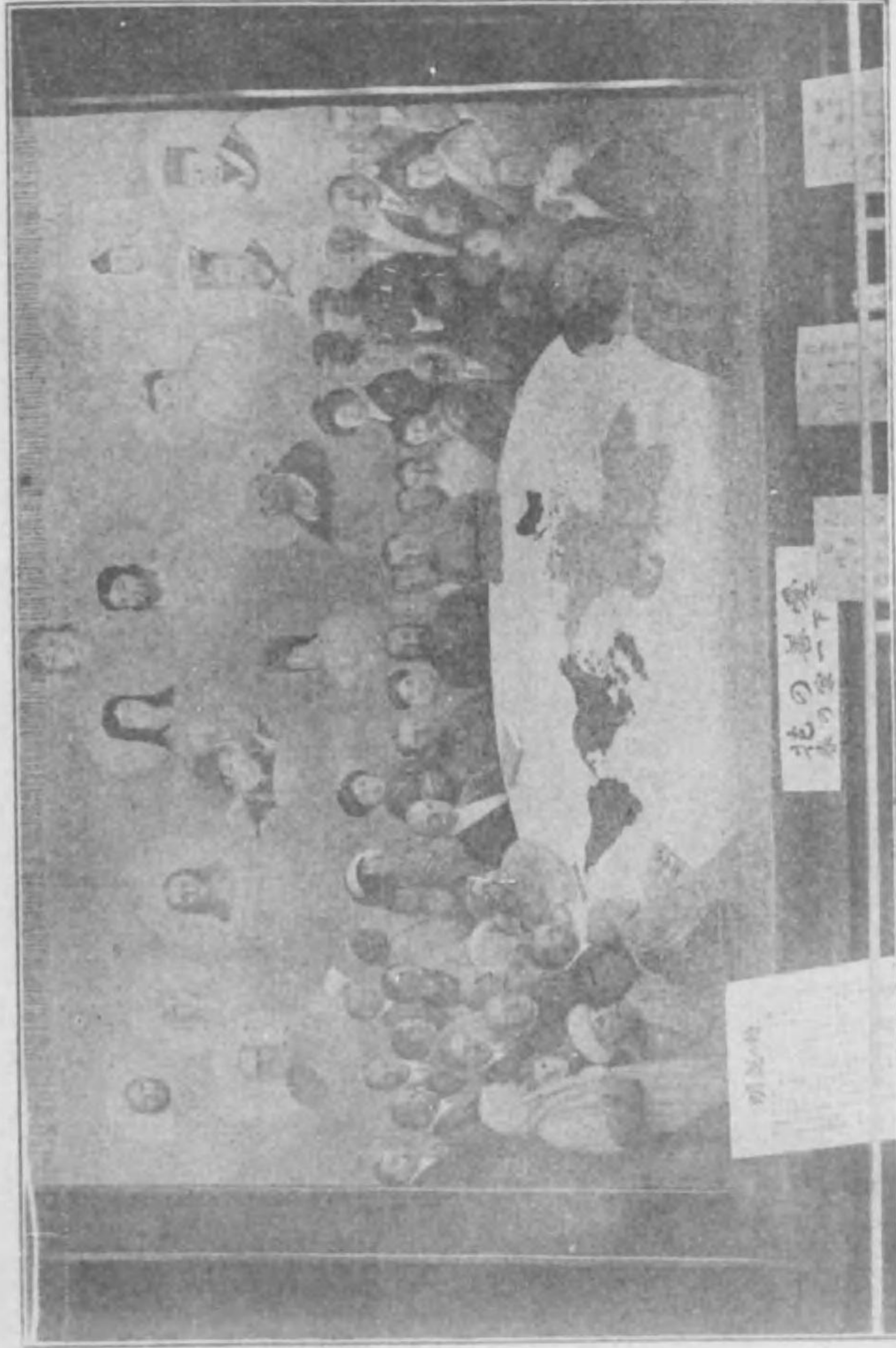
一昨日から十七日まで五時半閉館。

入場總數七六八〇名。

▲観客とリク

一、愛善會の繪の前で、

『ねえ君たち、この繪を見給へ、この様に各人種が種別を超越して一つの神様の許に嬉々と集まつてゐるなど素敵ぢやないか。大本の教はこれなんだ。これが眞の教だ』
さう同輩の四五に説明の勞をとつてゐるのは伏見市衛生部長生野周旭氏。そして愛善新聞



春の家—天下第一天境理想の高最類人(六共)内館本大博宗

の購讀を申込んで去つた。

一 聖師様お寫眞の前で、

『私は姫路の一僧侶で御座います。今まで大本を誤解し、悪くも思ひ悪くも言ひふらして来ました。併しこの博覽會へ來まして自分は誠に申譯のない事を言つてゐたのに氣がつきました。私は今出口先生にお詫をしてゐたのでムいませす。——私の名前でも御座いますか、いやお恥しくて只今は申上げられません。歸りましたら葉書でも改めて御挨拶致します』と泌々語つて立去つた。

一、御寫眞の前をすぎて來た一人、

『出口さんの前ではどうしても帽子を脱らずには居られない。威嚴を持つて居られるからだそして又一面には、三つか四つの子供の様な天真爛漫さがある』

一、日蓮なんか足許へも寄りつけぬね、出口氏は神様に祀られる人だよ』

眞面目に見てゐた一人が同伴者と話して居た。(松村宣子)

◇三月十五日 大阪經濟新聞所載記事

京都市後援の

宗教博覽會

春の京都の岡崎公園と知恩院境内に三月八日より五月六日まで京都市後援で宗教大博覽會が開かれ、各宗各派より門外不出の寶物までも出品し各派の傳導師を派遣して宣傳してゐるが、新興宗教たる大本教、天理教も盛んに出品し殊に大本教は金五萬圓を投じて、高さ三十三尺内廊六十間の特設館を設け、出口師の書畫、詩歌千百點を出品し、専ら忠君愛國を鼓吹してゐる。十五日午前十時より市公會堂に於て開場式を舉行すと。

◇三月十五日 昭和日々新聞所載記事

京都市後援

宗教博覽會

各派の大宣傳

春の京都の岡崎公園と知恩院境内は三月八日より五月六日まで京都市後援で宗教博覧會が開かれ各宗各派より門外不出の寶物までも出品し各派の傳導師を派遣して宣傳してゐるが、新興宗教たる大本教、天理教も盛んに出品し殊に大本教は金五萬圓を投じて高さ三十三尺内廊六十間の特設館を設け、出口師の書畫、詩歌數百點を出品し専ら忠君愛國を鼓吹してゐる。十五日午前十時より市公會堂に於て開場式を舉行すと。

◇三月十五日 北國夕刊新聞所載記事

好評の出口氏作品展

人類愛善會能美支部及び御幸支部合同主催にて出口總裁作品展覽會を十五日午前八時から午後五時まで御幸村字串元島口醫院跡で開催した。出品點數書畫三十餘點其他樂燒、色紙等七十餘點、何れも逸品を陳列せることよて開場早々觀覽者詰めかけ、同地方としては初めての試みとて識者は何れもその作品に對して敬意を表し感嘆讚與せり。

三月十六日 於宗教博覧會大本館内

朝の五時高天閣に眼をさまし花明山苑内巡り見しかな
 豊生館冥加知らずの罰當り明くなるまで終夜點燈す
 國魂石高臺苑にあしたより引き上げ所々に据ゑをさめけり
 綾部よりハ組三十有餘名午前の八時龜岡に着く
 苑内の彼方此方を巡覽しその隆盛に皆舌を捲く
 十一時五十八分承仁と尋仁一行龜岡發車す
 汽車の窓玻璃戸すかせば天恩郷高臺春陽にいらか輝く

山本の溪口行けば川水の青く澄みつゝ春風流るゝ
 二條驛下れば分所長始めとし京都宣信數多出迎ふ
 例の如自動車はせて岡崎の宗教博へと急ぎけるかな
 京都分所に宣傳使會開かれて宇知磨其他出席を爲す
 鐵外氏表具店より二十幅歴史書の軸持ち込み來る
 大本館事務室に入り歴史書の人物名義記しけるかな
 宗教博地獄館をば巡覽し看守の鬼と握手してみし
 大本の王仁と宗教博の鬼と前代未聞の握手せしかな
 早々に地獄館をば立出で、再び大本館に歸りぬ

神宮道三條上る東入る大和博士の邸に休らふ
 宣信徒次々吾を訪ひ來り應接しながら櫻の歌詠む
 漸くに櫻五十首詠み終り大和氏邸を立出でにけり
 大本館歸りて見れば黄昏れて觀客の影見えず間廣し
 自動車に二代と如月御田村卓子四人同乗二條に向ふ
 夕暮の汽車に上れば二等室吾行四人の外に客無し
 金龍屋出口慶氏の一行は同じ汽車にて綾部に歸れり
 花園の驛に來れば黒衣の僧十七八人ブラツトに立つ見ゆ
 夜の野路を一目散に吾汽車は花より團子の嵯峨に飛び行く

龜山のトンネル潜れば眼の下に嵐峽館の灯影流る、
 溪川の流れ溶々瀬の音も高く聞えて丹波に出でたり
 山本の請田の口に来て見れば花明山高臺電燈輝く
 高臺の電燈右に左に目に入りながら驛に入りけり
 龜岡の驛に出迎ふ數百の宣信あゝに自動車馳せけり
 天恩郷歸りて見れば上壇に庭石配置調ひてあり
 小夜更けて寝られぬ儘に苑内を獨り巡りて明かしけるかな

○作歌 櫻 (五十首省略)

○群馬縣桐生市兩毛分所よりの來電

聖展今日明日開催御禮申します、今日拜觀者一一九六名、

午後七時四十八分發信 大川

○

昨日より春陽の氣の漂ひて暖かなりけり天恩の郷
 何となく涅槃會の今日は長閑にて月夜ながらに霞たなびく
 十六夜の月は御空に冴えきりて真夜中に鳴く家鶏の諸聲
 櫻草の花文机に匂ひつゝ、今宵の居間は長閑なりけり
 神苑をそゞろ歩みつ岡崎の宗教博を偲び繪を思ふ
 月の光いと清くして晝の如くそゞろ歩行も樂しかりけり

○宗教大博覽會大本特設館より

三月十六日 (第九日)

第三日曜のことゝて団体よりも一般的な入場者が多い。——今日は京都分院にて近畿第一分會の宣傳使會合が開かれるので入場者中宣傳使の方を時々見受ける。——宇知磨様御來館暫くして分院へ御出でになる。

「大本館をみなくちや博覽館を見た價値が無いのですよ」と団体の先頭にたつた僧侶が言つた。そして「大本館を一巡りすると世界漫遊が出来る」とつけ加へた。

午前中に二千百十名。一萬突破を豫想させる。

午後零時半、聖師様、二代様御來館。お二方とも大層な御機嫌だ。二代様が樂焼をなさる『愛善の花、天下一家の春』の繪を御覽になつた聖師様、よく出來たとお褒めの言葉。そして『昔から川柳に「唐人を入りこみにせぬ地獄の繪」といふのがあるが、この繪には各個人が集めてあるのだ』と談笑された。——猶『地獄館へ行くと鬼が歩いてゐるが(人間が縫ひぐ

るみを着てゐる)この入口にも王仁がゐる』と仰有つて大笑された。

三時頃大阪市上ノ宮中學校の團體が六百五十名入場する。——小雨がやつて来てまた晴れる。——三時半頃、地方分會を了へられた日出磨様御來館。續いて橋本總務部主事補、その他分會出席者來館。一時、大本デーの感がある。

入場者の大部が信者未信者の別なく一様に讚美するので、これとて擧げることが無い。全く讚美の聲が常に館内に溢れてゐる。

閉館後聖師様指揮のもとに新に御揮毫の日本歴史のお軸二十幅を、御作品の一部を外してかける。——午後七時廿四分發にて聖師様二代様龜岡へお歸りになる。

入場者 九九一五名

今日迄のレコードである。お天氣だつたら優に一萬を超えたらうに。—— (松村宣子)

宗教博大本館の大人氣豫想以外は今日も聞くかな

三月十七日

於高天閣

午前四時高天閣を立出で、苑内隈なく巡覽を爲す
 朝の五時明光殿を叩き起こし再びこゝに安眠を爲す
 穴太より齋藤與四郎氏來訪し子息の結婚報告されたり
 又しても穴太の惣松出で來たり何かこめくほざいて歸る
 今日も亦大本歴史畫染筆のため月光寮に出で行く
 歴史畫を二尺絹本六枚に漸く描けば又肩が凝る
 染筆の最中に二代吟月を伴ひ來り揮毫の狀見る

彌勒殿大額書かんと近侍等に墨摺らせたり大祥殿にて
 大國氏夕刻歸郷宗博の今日一日の狀況報ぜり
 御田村氏夕べ高天閣に上り滿蒙の件詳細報ぜり
 久し振り飯田蓉月田口氏に送られ東京立ちて歸れり
 今日も亦聖展會の隆昌を桐生の大川電にて報ぜり

○武藏國桐生よりの來電

『今日拜觀者九〇五名 御禮申し上げます。大川』午後六時五十二分發、同七時二十八分着

○
 珍らしく昔の知己の訪ひ來しと月光寮にて傳へ聞きたり

董月は新居濱の婦人案内して宗教觀覽夕刻歸郷す
長春の宣使妻子と五人連れ修業終り吾にあひ行く
蓉月氏送り來りし田口氏は綾の聖地へ上りしと聞く
東の山の尾の上に月さえて苑内静けく犬の聲きく

○
その君と二人であれば春の夜は短かくありとも眠たくはなし

○庚午年二月十七日午正統壇

雲 沙 實

定又 敏誠 恭侍

彌勒佛奉

命前驅到ノ

雲 沙 實

自妙山來ノ

蒼々此天。雲霧雖有變幻。究意同屬一悉。茫々此地。水陸縱然不同。其實同載
一体。芸々此衆。色族即或有異。而其受形爲人也則一。騰々此教。名稱雖云各
殊然其修善也則一。惟是各同其一。則靈界均屬一体。惟其造化也一。而其參育
也同。此世間人群物類。所似因一善之修。而同歸於靈界也。今者中和兩地。昌
道諸子。既各東虔誠。由人世之異。而其趨於靈界之同。是凡世界同道同慈。同
修同志之事業。皆當着々進籌。以期山一而二。聯五爲六。共止於一止不變之真

境。然後乃可以見昌道各子之功候已。其進壽此為何。即由中和兩總會。而組世界總會是也由此徐々展佈。則普化之功。庶乎乃克以立其基已。此各方今次蒞和之功果。雖曰責在代表華修。參觀宗教博覽。實假此機而為世界人群物類啓一同歸於靈界之機也。至於慈淨之宣演。是藉此機。而授修誦於和衆也。自大道東漸以至於今。初則先施以慈。再則即示於道。今為其三。乃授以修誦已。以斯三者相生相循之變化。即可以悟乎靈界無別。大道一家之所以已。曷示諸修。其各悟之可已。ノ

神吉以忠誠之氣。而昌道慈普遍之機。是誠神人兩界。所共欽者也。即派為母院關化統掌。以彰汝堅恒之修。於辰望授籍。各々記遵。ノ

各子明日。再侍一統。即赴京都參觀。住三日。即先至綾部。繼至龜岡謁尋承。並覽靈勝。各住二日。再赴東京。此所以聯中和之誠。而為世界共謀相親相愛之

修也。各々知遵。ノ

判單一目

弟子神吉等因綾部京都二處進修弟子均應
虔誠擬懇在各該院開沙及書畫壇一次並
同道院亦擬請開沙一次可否之處伏乞判示

次各方之來和也。非流通示訓之性質。其責任在代表參觀。謁見尋仁。聯彼此之誠懇。作世界之正覺者。神總兩院開沙。乃所以助示人事之不及。啓示道慈之玄機此也。既可以昭統系之不紊又可以見大道自然中之平庸。平庸中之自然也。今者各地修人。既有如是之誠。是亦難以力却。准於各院。各開統書一次。以資有志之修者。參研可也。但沙訓必以中文之理。各方須將前訓。再行剖示。以釋狡黠者之疑也。各々記遵也。冊

彌勒佛正文。各院書壇。以各堅誠有重責之職方者。先簽名。至多不得逾六十之



數也。因壇時所限。是不能不如是耳。但簽名有道名者。簽道名。無者簽家名。家名亦無者。簽本名也。各々記之。先事籌備可也。知之。ノ
文免正自校。

○二月十八日午正統壇

沙

雲

彌勒佛奉

ノ命自妙山來ノ

各方無目而請示乎。(答因求修二人要列目)是不成問題也。修者當從入修之手續而辨理之。又有何向。不過求修以後。研修是爲問題耳。入修而弗能研。修也何

云入也何益。是機之動。當爲各方所共同悉研者也。各々記遵可已。

再居阪此。當入修於阪院。居神者當入修於神院。是爲至要。然因交通便利之故。或宜於阪。或宜於神。是又必因其所宜而定之也。各々記悟之可已。ノ

沙
雲

ノ自妙山來ノ

萬物之生也。自生之乎。萬物之滅也。自滅之乎。生然自生。生者自有其主。滅非自滅。滅者自有其因。生主之要。固靈爲本。滅化之因。渙无是。由。靈也者至空不空之体也。无也者自無而有之素也。葆其氣而不失。則可以延年。固其靈而不散。則可以永存。是以仰觀俯察。以萬物之形色。生滅之變化。由靜中以悟其動。因動中以求其靜。則生存化滅之機。不自於萬物。而能主自於萬物者。於此

亦可以知其玄妙已。以人之修。而悟於是。則動靜變化生滅久暫之道。庶幾可以明其所以已。曷示諸方。其各悟之可也。 /

昨今兩日之侍壇者。均各賜天靈一次。以益清靈。而益智慧。但各職方均以職波等差之次。而各加天以錄也。各々記遵可已。 /

派神吉尋宗爲中和兩方聯歡統監。即日就職。各々記遵。 /

派神吉爲世界出總會々監。派尋宗爲世界出總會交際部主任。均即日就職。以俟中和兩總會。共同組成世界出總會時。各職再行由萬方共舉而任之也。各々記遵並進籌擬章則也。但世界萬總組織之大體。會中有職員。而無會員。會員皆隸屬於世界各國總會之內。職員則由各國總會推舉之也。至於訓派者爲例外。而會其負責之務。不必俟推而定之也。各々記遵。勿忽可已。 卍

彌勒佛正文。各方行禮。均不可有中和之分。請壇時由各該院之掌監行禮後。即

由慈果臨時行壇々監。率纂宣錄行禮。可也。各々記之可也。 /

今日

之訓。極有深意。着淨子將葆靈固靈之修誦。爲各方簡要略言之可也。各々記遵。 /

愛道者必愛人。敬神者必敬訓。此各地明道堅誠各方。所以愛纂宣錄之靈。保纂宣錄之靈也。人也如是。而神又甚焉。此次各方分赴綾龜。寓有養靈之意。若至京總二日壇畢。

之必有會汝等遨遊山水以充清靈之機也。各々先記遵可也。 /

奉

之命各方至總。當即午正侍統。各々先知之可已。 /

○宗教大博覽會大本特設館より

三月十七日 (第十日) 快晴

今日から休憩室にピアノが据ゑられて、音響の一つもなかつた館内に一段と天國氣分を添へる。館外には快い春陽が輝く。

知恩院の大法要が今日で終るせいか団体入場者が少い。その代り入場者がたねんに陳列を見るので、より以上の効果がある。

午前中の入場者一〇一〇名。——空碧く春風徐ろにピラを配るお嬢さんのほつれにもつれる。

入場者總數四千百六十六名。——明日午前十一時二十分紅卍字會一行京都驛着の報を受取る。

▲観客批評とりぐ

一、『八木の少し奥の方から登りましたが、大本館の評判を聞いてわざ／＼来たのです、来た

だけの事がありました』と告げた人がある。さうした所まで人氣は傳はつてみると見える。

一、『全く生神様だ、非凡とか偉人なんて言葉ぢや言ひ盡されないね』と同伴者と私語しあつてゐる人もある。

一、深草眞宗院の石黒觀道氏。入場後常に敬虔の態度を持ち、終始無言。靈界物語を購ひ

『またお目にかゝります』とて去る。

一、開祖様御使用大本寶物の前で語る人——

『これは大したものだ。百年も経つてみる、國寶として博物館に藏められるよ。かうして拜見出来るのも博覽會だからこそだ。本部へ行つたつて逆も拜見出来ないに違ひないから』

(松村宣子)

三月十八日

於高天閣

朝あさの空そらぎんよりとして風かぜもなく暖あたたかかなるかな天恩てんおん神郷かみかた
 彌勒みらく殿でん懸額けんがく大文字おほなむじ彙筆ゑいひつを揮かひて書かきぬ大祥殿おほしやうでんにて
 意外いがいにも十八尺じゅうはちしやくに三さん大字おほなむじすらく書かきたり心持こころもちちよく
 富有ふゆう柿かき植ううる場所ばしょをば指揮しきせんと近侍きんじ伴ばんひ立ち出いで、行ゆく
 村上むらかみ氏うぢ邸ていを訪たづねて三十五年さんじゅうごねん昔むかしの知己ちきと面談めんだんせしかな
 大本おほもとの理想りしやう農園のうえんあとにして紺屋こんや町まち月光げいこう寮りやうに入いりたり
 大本おほもとの沿革けんがう活畫かつが今日けふも亦また二尺にしやく絹本きぬもと四枚よまい描かきたり



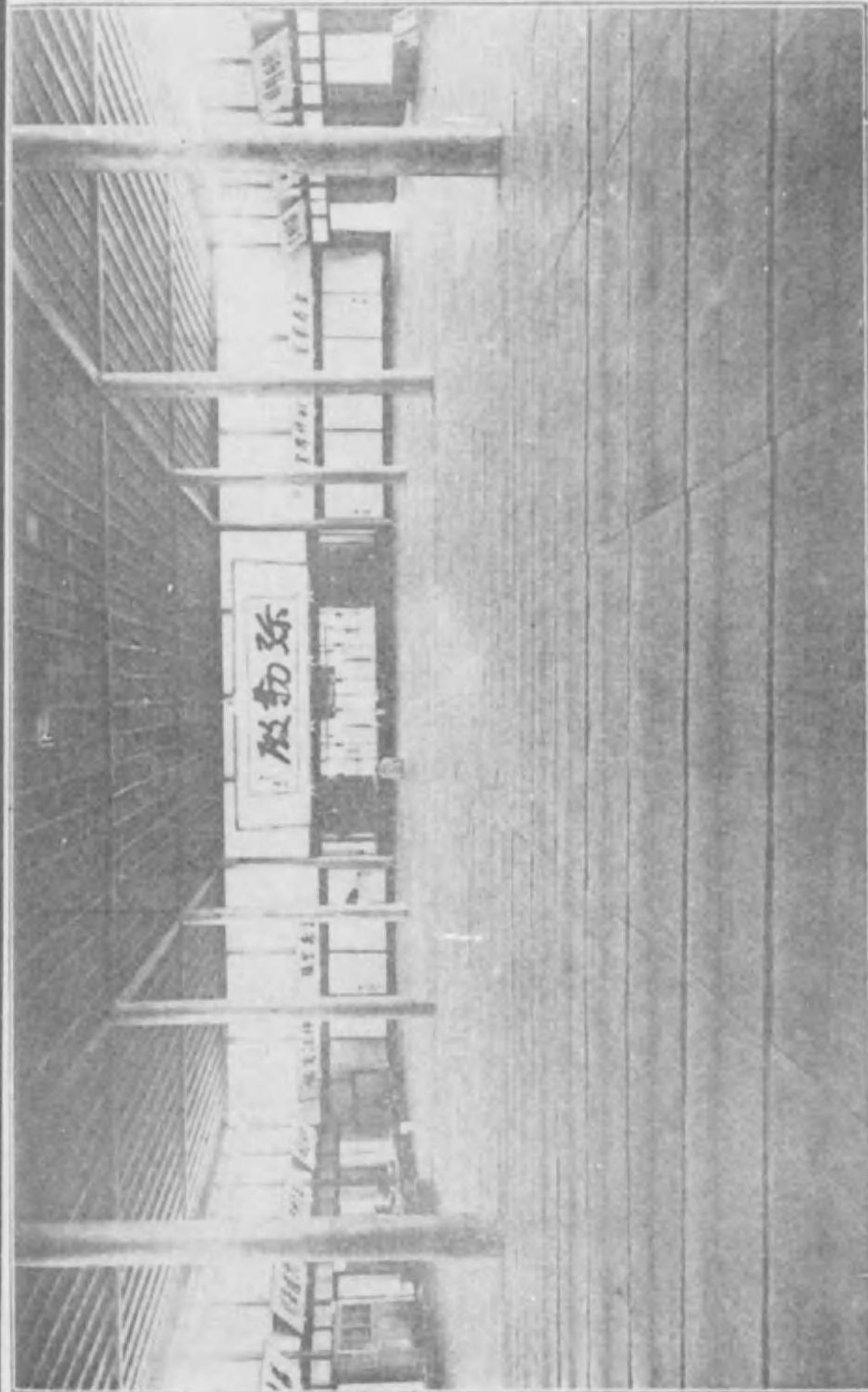
朝奇口田の中空揮筆懸額神郷

沿革畫いよく今日は總計して全五十枚と成るぞ樂しき
 苑内に歸りて庭に巨石をば献勞士と共に置き据ゑにけり
 月宮殿清庭獨り歩みつ、神の光の強烈さを知る
 午後よりは御空曇りて風寒く再び冬の來る心地す
 明光殿夕べの机に打向ひ歌の短冊五十二枚書か
 田中夫人夕べ來たりて珍らしく寶石や玉献納爲したり

○大 本 格 言

○藝術即宗教 宗教即政治。

○現代を征服し得ざるものは眞の宗教に非ず。



種 物 殿 内 の 書 架

○道は單一無雜にして萬古不易なり。

○宗教は時所位に因り宗祖に因りて多少の變異あり。

○
稻麥を作りて朝夕いそしめる人こそ國のたからなりけり
田に出で、暑き寒さも厭ひなく土に親しむ大百姓かな
晝は田を作り夕べは蠶飼する田人ぞ國の基なりけり
麥の田に横目もふらず培へる小田人かすめて汽車走り行く
五月雨の降りしく野邊に樂しげに里の霜のいそしめるかな
小田人が國のもととゐと土の上にとぼせる汗に實る豊稻
風吹けば心をいたため雨降れば注意の深きたがやし人かな
田の村も文化の風に襲はれて安き生活も苦しき小田人

霧こむる山田の奥にもうくと牛鳴く聲のゆたかなるかな
朝夕に田に働けるみたからははげしき世にも心安く過ぐ
朝未明星の影ふみ夕べには月にたがやす秋の小田人
朝な夕な土の匂ひにしたりつゝ田を作る人御國のいしずゑ
國のため家のためとて小田人が寒暑いとほす野邊にいそしむ
春の田に立ちて麥生の青み行く状見る田人の幸多きかな
天地に愧ぢぬ心地や持つならむ朝夕汗して耕す小田人
小田人が夕べの庭に研ぐ鎌にきらめき渡る三日月のかげ
家のため御國の爲に野に出で、働く小田人世のたからなる
玉の緒のいのちの親を育てゆく田人は世界の小さき神なる
移りゆく世の風潮を餘所にしていそしむ田人ぞ國のみたから
大本の神の御のりは未だ世々の聖も知らぬ教なりけり

月星をいたゞき朝夕いそしめどうら安からむ小田の田人は
小田人も外國ぶりのころも着て野邊にはたらく昭和の御代かな
吾かげも水田の中におとしつゝ朝日を浴びて田人野路行く
たな駄に水泡かきたり向もゝに泥かきよせて草取る小田人
牛追ひて家路に歸る小田人の上に冴えたり夕月のかげ
有明の月の光のいまだ照れる野に田をすける耕牛の聲
空晴れし日は田に出でゝ草をとり雨に書を讀む田人の豊けさ
世智がらき市をのがれて小山田に田作る身こそ樂しかるらむ
小車に山と積み行くはたつものは皆小田人の汗にぞありける
畝の音軒近き小田に聞ゆなりあしたしもへの麥を蒔くらむ
夕餉たく薬家に煙立つ見えて野邊の細路歸る小田人
里人が八十八夜のちかづきて小池にひたす粃の種かな

田をすける牛休ませて田の畔に煙草くゆらす小田人長閑けし
千早ふる神代の業をそのまゝに高田くぼ田をたがやす里人
麥飯を朝夕食ひて世のために小田の里人米作るなり
夕月の里の小川に牛入れて一日の疲れ流す小田人
春秋の野邊に立ち出でたなつもの作る田人や樂しかるらむ
天地の神の恵みを覺りけり日に夜に榮ゆる稲田の光に
大道を四方の國々開き行く粟と設けし理想農園
安國の基と作る理想郷田の面の稲の豊なるかな
理想郷長田にみゆる稲の實は年に三度の收穫せしかな
夕まけて麥かる小田にびか／＼とかすかに光れる初螢かな
筆を持つ今日の吾身は若き日の田作る業の羨ましきかな
惟神道に居ながら思ふかな田作る人の樂しき心を

大歳の神の守りの深ければ豊なりけり田畑の生きもの
天照皇大神の初めまし、田作る業ぞ國のいしす原
田作りの業は苦しく見ゆれども文作るよりは樂しかりけり
陸奥の安達ヶ原の草藪も今は田人の汗に聞か
都人の營む凡ての生業も其の大本は農業の幸
世の中のすべてのもの、大本は土をたがやす事に始まる
昔より瑞穂の國と稱ふるも稻のみのりの在ればなりけり
田圃に樂しまん身となりしより心の雲も消え失せにけり

○宗教大博覽會大本特設館より

三月十八日 (第十一日)

よく晴れた朝。静かな日。——法要のあと、團體入場もなく、一般の入場もこれ迄の三



宗本館に赴き一團一行を迎へ

分の一か四分の一。一寸息拔きの形。

紅卍字會一行來館に關し大國主事は事務局宣傳部長岡本氏と打合せをなす。——午後二時半紅卍字會一行十名、大和京都分院管事先導 井上總裁、北村隆光氏と共に來館。館内係員一同正門に出迎ふ。大國主事案内にて一行たんねんに一巡。終つて本館中庭の喫茶室にて茶菓の接待を受け、再び大本館に來り、館前の廣場にて事務局の幹旋にて一行並に 事務局幹部及び寺西知恩院庶務部長、大本館關係者看守さん達一同にて記念撮影。後一行は河原町聖護院の丸家旅館に引上ぐ。

入場者午前五〇三名總數二一四五名。

昨日上田氏の手によつて五百枚本日四方氏によつて五百枚、夫々入場券が捌ける。

▲観客とめぐ

一、市内寺町法念寺の和尚さんから、その法念寺の婦人會全員に「大日本歴史會の主催で今度催された博覽會に神道で参加したのは大本さんだから是非大本館を拜見して来るように」

と言はれて參觀に來た婦人があつた。

龜岡や綾部を見物したことはあるが、今度この博覽會へ來て、この次はお詣りに行かうといふ氣持になつたと言つた人が十數名に及んだ。

◇三月十八日 丹波毎日新聞所載記事

- ▲宗教博の驚異は何といつても『大本館』
- ▲宗教を以つて自任せぬ大本が宗教博の大呼物となつてゐるのも一奇觀。
- ▲天國は登り易く地獄は陥ち難しと……喝破したところに近代味がある。
- ▲既成政黨、既成宗教、既成品にカビの生えた今日、この新興現象に注目されるのは當然かも知れぬ。
- ▲既成宗教家は時代の動きを靜視せねばならぬ。
- ▲宗教博は或る意味に於いて最も重視される。

三月十九日

於 大本農園内瑞雲閣
高天閣

明光殿起き出で見れば苑内に深霧こめて肌冷えわたる
 高天閣上りて四方を見渡せば山野を包む深霧の幕
 明光社歌句を選らむと近侍三人伴ひ瑞雲閣に出で行く
 多行松眞柏水仙色々新道の側に植ゑ込ませけり
 瑞雲閣東の庭に松柏を植ゑて四邊を縁化させたり
 午後三時明月宗匠靈媒者龜井三郎氏伴ひ來る
 田中夫人村上和氣子松井いの子靈子氏伴ひ訪ね來れり

田中夫人一行四人に十枚の短冊に歌書きて贈れり
 新しき湯槽にひたり身の垢を流して農事の指揮を爲したり
 思ふやう和歌や冠句の選抜も渉りかねて心くるしき
 黄昏れて一行四人かちあるき天恩郷に歸りけるな
 承仁と宇知麿一行午後九時の龜岡發に乗りて歸綾す
 文月氏宗教博より歸郷して大本館の狀況語れり
 夕刻に有田氏國手入り來り色々の事談してぞゆく
 夕刻ゆ御空くもりて風強く雨もよひつゝ小雨こぼるゝ
 うらく四方の山波かすみつゝ靜にく春は更けゆく

田の畔に草食む牛の背に春の風そよぎつゝ青草の萌ゆ
 去る年のかたみの枯れし草の根に春を包みてもゆる若き芽
 風吹けき空は曇れき何となく春の陽氣の漂ふ園かな
 天恩郷傑の枝の虫の種日毎とれきも未だ果てなく
 清董如三月女宗匠は瑞雲閣にて選歌の筆寫す
 紅正字一行十人京都まで無事安着と聞くぞ嬉しき
 大本の沿革史畫を今日も亦表装すべく人に托せり

○和歌(十九首) 冠句(四句)省略

○宗教大博覽會大本特設館より

三月十九日 (第十二日)

薄氷が張る冷たさ。今更火が懸しい。

入場者まばら。新しい話も聞かない。たゞ一言、來館したことのある人が他の人を案内して来て、看守さん達の話した通り説明して立去るのには驚かされた。

道院一行の動靜について問合せのため川端署より刑事二名來館。中村純也氏應對す。正午から京都道院で扶乱があるので看守さんの中から五名抽籤で拜見に出かける。知恩院から道院一行を迎へたいとの電話に接したので快諾し、明午前十時知恩院着に決定した。

入場者午前中四五〇名

午後字知磨様は開祖様御着用の綿入、袴、帯、足袋都合四點を持たれ御來館。明日陳列の筈。聖師様本日御來館の豫報ありしも御中止になつた由。

閉館時近く亞米利加人の夫妻來館。館内一巡して愛善會趣意書(英文)をよみて感じたる様

子、販賣部にて、WHAT IS OOMOTO. を購うて去つた。

歴史研究家が聖師様の日本歴史畫を見て非常に感嘆して辭した。そして大本館だけで歴史のいゝ材料があるといつた。それは世界宗教聯合會のこと、聖師の入蒙、青海王の訪問などがその一部である由。

入場者 一九五〇名

○三月十九日 丹波毎日新聞所載記事

大本の本案は

よそ目ではやゝこしいが

本堂はやはり綾部――

所得税を規つて繩張りを争ひ

龜岡側(園部稅務署)が負けた話

△……綾部は郡是と大本によつて置都であり又神都である。所が大本の本部は綾部か龜岡か、無論本部は綾部なんだが事實はどうやら龜岡中心主義になつて居る模様がある。

△……聖師王仁さんが夙くから龜岡に常住し惹いては宣傳本部や會計部迄が龜岡に移つて何れが菖蒲か杜若花引きぞ煩ふ大本々部……テナ課で今の中に何とかせねば何れは本家争ひが起らうやも知れない等の心配は内輪からより外部からの問題が起つた珍談。

△……といふのが福知山と園部の兩稅務署が本家争ひをやつたのだから面白い、といふのは所得申告が事の初まり、何がさて政府方面から収入減で喧しく徵稅のお達しがある。各稅務署では血眼で一厘一毛でも多く徵收して成績を挙げねば……と云ふのが表面には出さないが内心の閃きである。

△……本部既に綾部にある大本だ、福知山稅務署では従前通り勿論大本を算盤珠の中へ弾き入れて居る、と豈計らんやだ、園部稅務署が本部は綾部にあるが事實は龜岡に實權がある以上……大本の所得申告は是非當署へ……の内々運動が初まつたものである。そして内々其所得調査を押初めた。

△……と聞いた福知山稅務署、他人の田を荒すにも程こそあれと……あつて

王仁さんの本籍も同教の誕生地も將又其本部も共に綾部にある以上は所得申告は何といつても當署であらねばならぬと運動が初まる。

△……綾部町としても附加稅の關係もあれば廂をかして母屋を取られてはと聲援大いに努めると……いつた譯で茲許、大本の所得申告を中心に片や福知山稅務署綾部町、片や園部稅務署でエンヤリンヤの繩張り争ひ……

△……所が去る十五日の申告締切りを最後に美事に勝敗の數が定つた。それは大本から確かに福稅に所得申告が行はれた爲めで、こゝに外部の大本本部は矢つ張り綾部なる事が判然した譯、イヤ不景氣の生むだ悲喜劇ではある。

◇三月十九日 北國夕刊新聞所載記事

各宗派が一堂に會す

京都の宗教博覽會見物(一)

劃時代的壯舉とも言ふべき宗教博覽會は洛陽の春を俟たずして既に去る三月八日から京都岡崎公園に開催されてゐる。知恩院高祖善導大師の大遠忌千二百五十年法要の盛典と相俟つて開會前既に全國から二百五十有餘の團體二十數萬の申込みがあり、善男善女が雲霞の如く押し寄せるといふドエライ賑

ぎである。斯くも爾前に人氣は沸騰し全國津々浦々に至る迄其評判で持切つてゐるといふ有様である。宗教博が時代の催しとして意義深い事は今更言ふ迄もない。物質文明の行詰りが未恐ろしく感じられ今日世界人類の欲求が日に／＼宗教といふことに目醒めて來たのである。從來他宗を仇敵のやうに思つて來た各宗派が一堂に會し共同戦線に立つて客を呼ばうと云ふのだから實に面白い。有史以來破天荒の出來事と云ふべきである。

博覽會を見に行く途すがら筆者は現代の宗教に就て色々と考へて見た。現今宗教に對する議論は益々喧々囂々たるものがあり或る佛教の先達は自ら言つて曰く、宗教が今日の如くでは既成宗教は亡びるのだと言ひ、又或る人は既に亡びたのだとの論議もしてゐる。宗教の自由を叫ばれてゐることは既に久しい、然るに社會の一部には祖先傳來の位牌に向つて形だけの行事をなし眞の宗教といふ意義に向つて突入しようとしないのである。まだそれ等はよゝとして祖先の位牌さへもなく、神佛に對し禮拜することさへ知らぬ無神、無宗教の人が新しい學問をした人達に多い、果して最期迄無神論者で遁通し得るであらうか、又宗教とは最後の一種の道樂に過ぎないであらうか、火の無い炬燵を抱いてゐる人を見て、彼等は果して如何の感を成すであらう

か？「宗教は人類に最期の解決を與ふるものである」ならば宗教は人類の生活上最も必要缺くべからざるものであらねばならぬ。混濁せる世にあつては大いに自主的批判力を要するのであつて、徒らに盲目的行動は許さないのである。此の意味に於て宗教に志有り、又宗教を批判し、理解せんとする者に取つて此の宗教博は千載一遇の好期である。

金澤を夜十時卅九分に出た汽車は朝六時半頃京都に着く、驛前から熊野神社行きの電車に乗ると僅々六錢約廿分で東山通二條に着く。此處で下車すれば岡崎公園は東一町ばかりで始めての試みであるといふ宗教博覽會は物質文明の行詰りに悲鳴を擧げ精神文明に向つて世界が動搖し始めようとする現世では意義ある催しであると言はねばならぬ。

知恩院では、高祖善導大師の千二百五十年祭を同博と共に開催し傳來の秘寶は博覽會場にも多数陳列されてゐる。博覽會場は本館、知恩院及び附屬第一、第二の四館に分れてゐる、本館の門を入ると直ぐ右手に異彩を放つてゐるのは大本館で、先づ大本館から見て行く。約卅尺の屋上に大弦月が異様な光を浴びて中空に輝いてゐる。

館前には右に宇宙章左に日星章が色彩鮮かに掲げられ、入口の直前には大本の生神として信徒の渴仰の的となつて居る出口王仁三郎氏の筆になる畫幅が先づ人の目を牽く。右曲すれば同教の海外宣傳の實況並に出口氏の蒙古宣傳當時の寫眞等があり、大本が斯くも世界的に宣傳し活動しつゝあるかに一驚を喫する。(つゞく)

◇三月十九日 丹波毎日新聞所載記事

大本が中學校を

設立する計畫

園部公園借地申請中

廿三日王仁氏の講演會

大本では出口氏の第二の故郷と云はれてある園部町に大本の中學校を設置せんと目下種々畫策中で、山下町長初め有力者間と園部公園を無償提供の要求に關し交渉しつゝあるが、園部公園は官有地なるため園部町から府知事宛

に拂下若くは永久貸與されたき様申請書を提出したが、その結果如何に依つては具体的に該問題は進捗するものと思はれるが、今回山下町長、田口前町長、及び淺井、山口其他町議有志、學校長、諸官衙長の肝いりで二十三日午後一時より園部公會堂で出口氏の講演會を開催し午後四時からは園部有力者の懇親會を開催の筈。

○ 大本は世界大學的唯一の大教育を爲すものにして、園部などに中學なんか起す必要なし、何かの誤傳なるべければ、茲に一言新聞記事に就き言明しおくなり。

三月十九日新聞記事の誤傳を正す

三月二十日

於高天閣

昨日は彼岸の中日に當るといふに今朝からの寒氣は再び冬の荒天地を偲ばしめらる。北の風高臺に吹き荒び、先月末植込みたる細長き松檜を根元より揺すり廻し荒れ狂ふ様を見れば、折角の植樹も無益に終らむかと思ひ配一方ならぬ。又宗教博の大本館の臨時建物についても聊か心を痛むるなり。

高天閣玻璃戸揺すりて荒れ狂ふ春風寒く靜心無し
岡本氏未亡人息子伴ひて天恩郷に上り來れり
風寒く樹をもむ音の高々と聞えて頭重き朝かな

大本の沿革史畫を十有枚京都の表具店に送れり
和歌の選爲さんと思へき氣疲れのためにや心の向かぬ今日の日
光照殿庭の松樹を根こぎして苑内彼方此方移し植なす
風すさぶ苑内潜り安生館に松田氏病床見舞ひて歸る
小雀の聲苑内に高々と吹く風の音に和して聞ゆる
今日も亦龜井靈媒訪ひ來り祥明館にて入信を乞ふ
明月氏二代澄子の樂燒の皿一枚を貰ひて歸る
大本の本家は綾部か龜岡か福知園部の稅務署手ふ
大神の定め給ひし綾部こそ誠の神の在ます大本

龜岡で事務は執れども和妙の綾部の聖地ぞ神の大本

○前橋支部より聖展の報電

聖展今日明日二日開催、御禮申上ます。今日拜觀者三五〇名

五時三十一分發 前橋支部

農園に到りて見れば目をあけて見られぬ仕事の進まぬ状かな
澤山な人は居れども是といふ仕事も見えず草のみ茂る
前主事の笹原技師を再舉して農園監督させむとぞ思ふ
今日も亦昔の人の訪ひ來り面白可笑しく語り合ひけり

古を語る心も安町の長閑なるかな風は荒べど
富有柿苗を購はんと雄月を篠村隅田に遣はしにけり
富有柿苗三百本篠村の隅田より買ひ取る約を爲したり
古の人の歸りを見送りに巾着花を一鉢わかつてり
祥明の館にしばし休らひて夕飯しながら櫻の歌詠む

○作歌

(百二十三首省略)

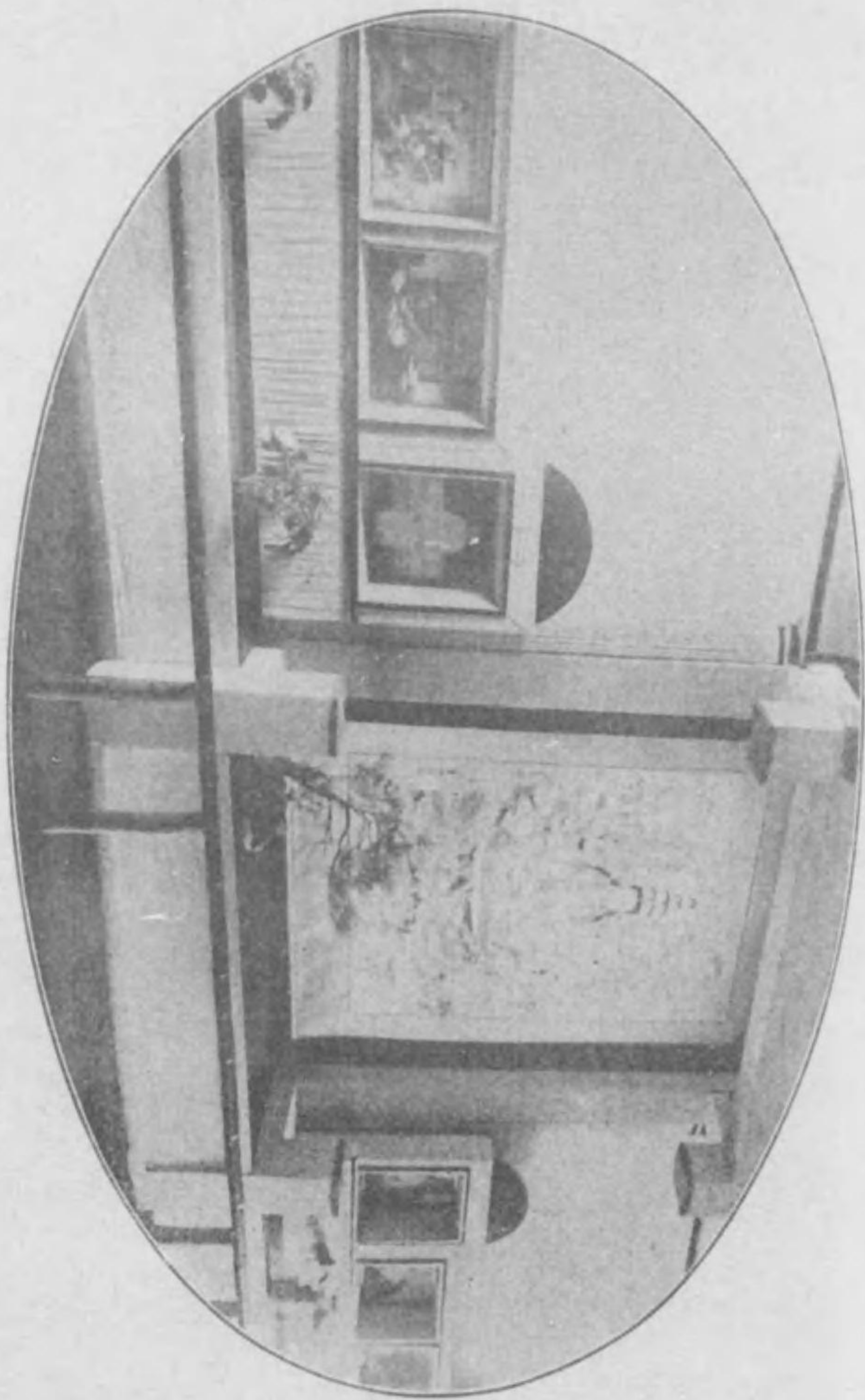
いづれ散る花なら散つても構はない窓打つ風の音が嫌いだ
櫻花盛りを風のたゞくやうに男性的の事がやりたい
春風に心地よく散る山櫻を大和御魂と云ふ奴解らぬ

○在東京牧野氏よりの來電 (受付午後七時二十分)
 御厚意を謝す。朝將軍本日京都に着いた。御會見あらば萬事宜敷、久原氏會見後は萬事都合よし。

牧野

○
 今年は例年に比して暖かく四月初旬には櫻咲くらん
 大本館もしも無ければ今回の宗教博覽會は駄目なる
 美馬宣使贈り來りし躑躅苗五十本をば植たり農園に

○作歌 待花の部 (五十五首省略)



音觀子千重師聖口出(七其)内館本大博宗

神苑の樹木植替え初めけり

○宗教大博覽會大本特設館より

三月廿日 (第十三日)

午前九時に道院一行が見える筈であつたが豫定が變つたと見えて一向その姿が見えぬ。今朝の大毎紙京都版に掲載された道院一行の來朝並に宗博及大本を訪問する云々の記事は大部各方面に刺戟を與へたとの評判である。

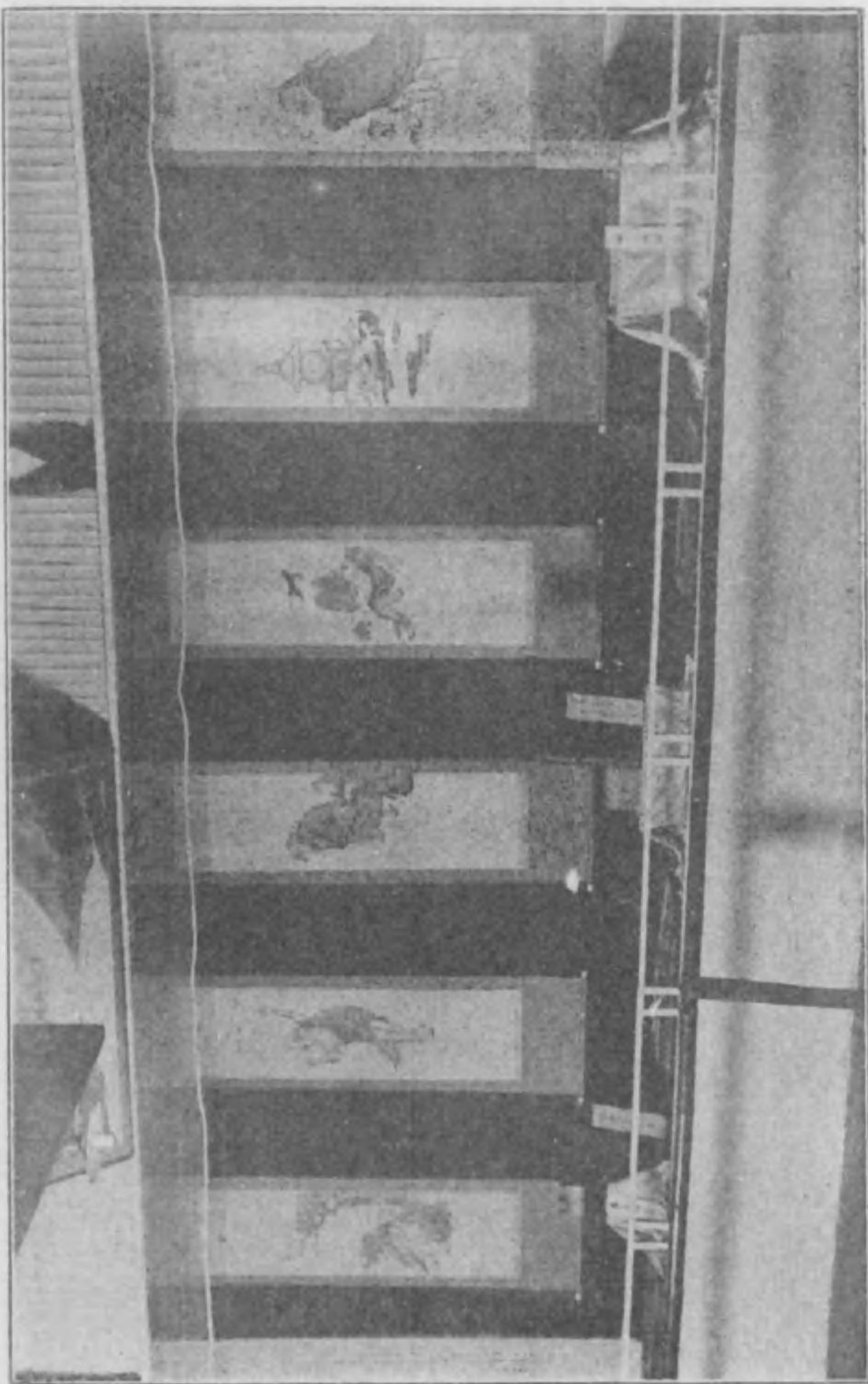
昨日に同じく閉散。裝飾部の人達は朝から工作に忙しい。

恰度閉館して了つた所へ道院一行が來館した。樂燒に暫し興じて去る。

入場者 二八二五人

▲觀客批評とりぐ

宗博大本館内共(八) 佛師筆畫幅



一、綾部の人とかいふお婆さんが語る。

「私は以前に信仰してゐたのですが、あの十年事件で今まで大本を離れてゐました。併しこの博覽會を見てまた信仰に立歸りたい氣持になりました」

かうした氣持になつて再び神様のふところに歸る人達のためには今度の博覽會は絶好のチャンスだらう。

一、西村夫人が二時間を要して館内を案内した人は實にこまかくみて行つた。そしてすべてを感嘆の辭で包んで去つた。聖師様をよぶに出口先生の尊稱をもつてし、その言葉にも敬虔の念が滲んでゐた。

「私は鈴木松年？ といふ日本一の松の繪かきを存じてをります。そしてその繪を現在に於ける最高のものと思つてをりました。併し出口先生のこの松の繪（屏風）は何と素晴らしいものでせう。鈴木氏にして遠く及ぶものではありません。かうした博覽會によつて他の宗教がその本義に目覺ねばなりません。大本館は實に他の宗教に對するよき刺戟劑です」

その面には熱を漲らしてゐたとか。そして聖師様に是非お目にかゝりたいといふ。猶、

「證を失した言ひ方ですが都合があつて只今私の名を申上げることが出来ません。併し近いうちに天恩郷でお目にかゝる時機のあるのを約束しておきます」とて去つた。

一、僧侶らしい人の話

「開祖御使用物は事實實物である。「祖師は紙衣の五十年」といふことがあるが、自分はこの質素なものを拜見して自づと頭のさがるを禁じ得ない。現在の僧侶は錦襪の法衣を身にまとうて、その癖その本義は何處へかその居を轉じてゐる。その僧侶たちはこれを拜見して覺醒せねばならない。併しふるい宗教ほどだめだ。現在は新興宗教が力を得て活動する時なのだ。ふるいものは滅びねばならぬ」

一、福島から來た人が語る。

「山口先生のお書きになつたものなど拜見してたゞおつたまげるといふより外に言葉がない。たしかに現世に現はれた釋迦だ。後の世にはこの御掛軸が國寶にならねばならぬ」と。

◇三月二十日 京都日出新聞所載記事

所得税申告に絡んで

大本教の自家争ひ

兩稅務署が引張り合ひ

結局龜岡側が負ける

昭和五年度の所得申告は去る十五日を以て一様に終つたがこの所得申告にからんで綾部の大本教か大本の綾部かと迄有名である大本を中心に福知山と岡部の兩稅務署が互ひに自家争ひをした珍聞。

それは近來大本教が伸長して龜岡の舊城趾に堂々たる大建築をなし、宣傳本部も會計も同地に移し御大の王仁さんも殆ど龜岡に詰め切りといふ状態であるがそれによつて綾部の方が本家か、龜岡の方が本家か一寸見解がとれなくなつた。處で岡部稅務署では年收數萬圓を下るまいといふ大本教の所得申告、從來は福知山稅務署にしてゐたものを本年より本署にしてほしいと申告

をすゝめた。かくと察知の福知山稅務署、こは以ての他のことゝ直ちに署員を綾部に派し三代様をたづね一方戸籍面を見ても王仁三郎氏の戸籍も綾部にあり、大本の誕生地たる綾部、如何に他所に進出しても大本と綾部は切り離せない、所得の申告も當然從來通り福知山署へと、こゝに兩署がヤツサモツサの大闘着この事を聞知した綾部町役場も附加税に大關係ありとして極力福知山へと味方し理事者は大本へ俄にお百度踏みといふ運動、結局期限の十五日福税のいひ分が大本教の神がよりと一致したらしく福知山稅務署に申告されたので手腕家としてライラクの和田署長、世の中も不景氣となるとつまらん事に彼是とせにやならんと福々しい顔で大笑ひである。

◇三月某日 奉天新聞所載記事

紅卍字會の

堂宇建立

大本教の生神さま山口王仁さんの來長當時盛んな歡迎ぶりを示し民族意識をぶち破つてみせた城内の紅卍字會々員は漸次その數を増加して來たので一つ會堂でも建てようといふ積極的意氣込となり會員の主だつたもの相集り世

界紅十字會長春支部なるものを設置するに決した。富裕會員はそれ／＼應分の私財をさき、堂宇建設の基金となし、日下地所を選定し、拂下げ方を支那の役所へ向つて要請中で近く工事着手の運びとならうといふ。附屬地内でも大本教の信者は漸く増加しその潜勢力はなか／＼侮り難いものがある。

◇三月二十日 北國夕刊新聞所載記事

各宗派が一堂に會す

京都の宗教博覽會見物(二)

次に大本の世界に於ける各提携団体及びその團長の寫眞を並べ、例へば獨逸ノイガスト白旗團長シユワイツェル博士、アルガリヤ・アランカ・フラタロ一指導者ベトル・ダーノフ氏 支那道院總監王芝祥氏大本歐洲本部長西村光月氏等がある。

◇ 大本が海外宣傳の爲め世界各地に於て發行せる英、佛、獨、支等の各雜誌等を配列し、世界的文書の宣傳實況を示し、歐洲に建設さるゝ愛善堂のモノラマを配し、宗教、人種、國籍、言語等の差別を超越して愛善の理想郷を建設

せんとし、近く實現すべき大本の理想郷を偲ばしめ、海外に於ける大本の宣傳使の寫眞を掲げ、猶尅大なる世界地圖には豆電氣を點滅式にして世界に於ける大本運動の實況を一目の裡に示し、海外より大本を尋ね來る者の書信は山と積まれてゐる。而して蒙古王及び支那各有力者より出口氏に送られたる書並に自讃の寫眞等あり。

◇ 猶歩を進むれば大本一大記の繪巻で約百五十種、出口氏自ら旬日を出でずして成したりといふ神作に觀客の多くは均しく驚異の眼を瞠つてゐた。繪巻により大本の歴史を讀みつゝ行けば同教の寶物だといふ開祖の石臼、自ら紡がれし糸、又は廿八年間一萬巻をもせられたといふ御筆先に使用されし机硯、筆其他遺物等があり、其の努力の跡を見ては自から敬虔の情が湧く。行く處見るところ出口聖師の藝術其他で多趣多様なるは驚くばかりで、繪畫、樂燒、詩歌に、靈的方面には靈界物語等の出品があり、殆ど大本館の全部が出口聖師の偉大なる人格の顯れである事は言ふ迄もない。大本の本據たる京都綾部、龜岡に於ける靈地は模倣、寫眞等により發祥地の實景も判明である。

◇ 場の終りには、エツセンス即ち大本の教旨を明記し、又教示を離れた世界

人類愛善會の教義等を列記してゐる。之れに對し發行十五萬を有するといふ愛善新聞、大本の言ふ『藝術は宗教の母也』を現實せんとする明光社の文藝方面或は樂燒場を設けて一般觀者に對し各自作の樂燒を頒け與へてゐる等至れり盡せりである。大正十年出口氏が二三の從者を連れ密に蒙古に入り吾國の人口食糧問題を政治家に機先を制して解決せんとし、アツヤ銃殺されんとして法難の二の舞をやつた其の雄圖は決して一個の宗教家とのみ見る能はず、是等の寫眞も同館に陳列して其の受難の跡を示してゐる。

◇三月二十日 大阪毎日新聞京都版所載記事

萬事トを立て

宗教博や大本へ

支那紅正字會の幹部

神のお告げて入洛

支那紅正字會の幹部、團長梁慈果氏ら十名は十八日朝入洛、大本教京都道院で少憩後午後二時過ぎから岡崎公園の宗教博を見物したが紅正字會は關東

大震災の時、米五千俵と現金二萬圓をもつて、お見舞と救助のために來朝して以來日本と深い關係が出来、昨年九月代表者が來朝して大本教と合体して以來出口王仁三郎氏を信仰し、今度其幹部らは神のお告げで來朝したのでと言つてゐるが、一行の日程、行動は總てトによつて定められるのであつて十九日も宗教博を見物したが廿日まで京都に滞在、廿一日には綾部の大本教本部に參拜することになつてゐる。

宗教博外國人も訪ひ來たり講嘆止まぬ大本館かな

◇三月廿日 兩毛織物新聞所載記事

盛況を呈した

敬祖展覽會

本日から前橋で

大本教祖出口王仁三郎師作品展覽會は既報の如く十六、七の兩日桐生俱樂部

部で朝倉市議が主催で開いた。
 繪畫から樂燒と殆ど神技の陳列で關口齒科醫先生は斯界靈の大家だが達磨
 の畫は草雲先生晩年に夢覺たりと驚かした程で非常な盛會に終了したが、更
 に廿日廿一日の兩日前橋赤城館に同展覽會を開くと。

三月廿一日

於高天閣

今日こそは彼岸の中日畏くも春季皇靈祭の吉日
 朝八時八分發の汽車を待ち宗教博覽會場に行く

一行は明月如月湯淺夫人靜枝子合せて四人なりけり
 明光社宗匠大本宣信徒見送る春野を東に馳行く
 二條驛下れば彼岸の中日にて人出も多く雜踏を爲す
 自動車を二台連ねて栗辻氏其他に送られ宗博にはす
 觀覽者意外に多く大本館酢司詰滿員身動きならず
 永米氏岡田和厚氏知恩院寺西聽學庶務課長訪ふ
 暖かき岡崎公園徒歩なして大和氏邸に一行出で行く
 久しぶり岡田和厚氏相共に大和氏方にて晝飯を爲せり
 や、暫し休らひ乍ら初櫻三十三首の歌を詠みたり

大本館再び歸り宗教博地獄館をば一渡り見し
 四十年忘れぬ友の訪ひ來り其宅さして自動車馳せたり
 自動車を二臺並べて紫野の岡田氏方に立ち出で、行く
 岡田邸休らふひまに初櫻歌を詠みつ、短冊十五葉書く
 岡田家を立ち出で二條を午後三時三十八分汽車に乗り込む
 龜岡の驛より自動車走らせて大本農園に植樹の指揮せり
 黄昏れて高天閣に立ち歸り支那一行と夕飯をこる

○作歌 初

花 (四十七首省略)

○二月二十日午正統壇

在京都侍

雲 寶

彌勒佛奉

命前驅到

各方侍壇。必須恭謹。所有喧嘩接耳各情事。均宜避之。中誠兩子記而肅之可也

ノ

沙 寶

雲 寶

自妙山來

世界治亂。系乎人心。人心邪正。端賴明新。邪則自邪。非本來之所賦。正者自

正。乃元始之所秉。先天之先。清凝無濁。後天之後。私慾乃蔽。邪念起於世欲。正靈昧於靈明。心良既失之於邪亂。而世間劫災之機。亦隱伏於未顯。上天悲憫。而因地制宜之教人以修。教人以養之法則。亦因時而降責於聖人焉。此世界宗教所由而生。則法所以不同也。惟是教雖不同。而其欲人為善。修人以正也則一。故善之所宗。無分異同。修之所止。無別先後。此平易無爲之大道。所以因世運之轉移。而有萬法同歸之機也。今者世界宗教。陳博覽於本境。其意所在。皆明々德。新々民之意。由一己之善。而善世界。因世界之善。而善一切。總其分殊之異。而其止於一止之宗。去其形色物象。皈其空虛真實。使世界如一家。和萬類爲一仁。永弭劫因。共享和樂。永生其生。久安其安。而弗再罹困難之苦也。各方既均協倡斯義。是尤當各矢己誠。以研其所以。各努其力。以致其所行。使大同之光。早遍世界。和樂之聲。早滿大千。是

老人所至望於各修者也。各々記之可已。 /

乱之動何由也。曰靈而已。夫靈之爲物。至虛而至清。至靜而至動。因其虛故必以實而現其體。因其清因必以色而觀其化。因其至靜。必求其象動。因其至動必參其中靜。然後以人之有々無々。而接其清虛无靈。運其浮沈出入。而乱機之文。乃早於沙已。各子之見於是。而未明於理者。可於此而悟其所以已。各々細悟可已。知遵。 /

本院各方。均極虔誠。雖云於平庸無爲之大道。與善修之大本。未能徹底其異同。然同善同修。未或有二也。今既各具至誠之心。以悟於是。而因此一善之誠悟。不能不有所變化。茲以來院侍壇各方之恭誠無僞者。各超以一二三世之先靈。以彰各々之修善功果。而勵後誠也。各々記之可已。 /

判筆。

一目 弟子神吉、尊宗等爲東京總院奉

訓開沙並擬請開書壇一次以資鼓

勵而資進修可也之處伏乞判示

准各所請。如京綾之例也。

二目 弟子神吉等因各職方弟子擬欲壇日華送神後

恭撮一全体開沙儀式影可否拍照伏乞判示

是無不可。在諸方於待壇時間恭撮。以爲不敬。是當然之理。在其他之一方面。未或不因此而致疑於神靈之拍照也。不知神靈之體。其大無外。其小無內。人世之動靜聲息。無惑於神也。各方既具如斯之誠念。當以各方之宜。無時而不可也。各々記之可也。

三目 弟子慈果因奉訓先至綾部後至龜岡惟

尋仁公出有期恐誤機要可否先至龜岡再至綾之處伏乞判示

令各方先赴綾部者。其意在於先神事而後人事也。各方既以仁子之所在爲轉移。先龜岡而後綾部亦可。好在修後以返先。培先以固後。功雖不同。其道一也。各々記之可也。准冊

彌勒佛正文

各方至東總。接待二日休三日。

之意。本擬令各方登富士之峰。接受靈光。以悟玄妙。惟因歸華機迫。時難再延。移各子於日光山也。觀華嚴之瀑。以悟圓活之機。感山林峻幽。以參靜淨之奧。是不特於散遊之內。而獲無窮之益。抑且於觀感之際。而明久暫之理也。各々記悟之可也。

各子知俗諺之不受魔難不成佛。不以規矩不成方圓乎。是皆期人自修之不懈也。各子既來和國。當隨遇而安。因俗爲宜。不可過於自便。致被人恥笑。君子自重

是亦當以忍耐之修功。而克己行之放浪也。各々勉之可也。ノ
休六度後。即以次陳紙賜書。各々記遵。ノ
文免正自校。並將沙訓用中文之理。先爲各方述之。各々記遵。

○本夕前橋支部より來電

『今日拜觀者 六七五名 前橋支部』

午後七時六分着電

○ 支那世界紅卍字會中華總會書信
敬啓者三月八日爲
貴會召開全國宗教博覽會之期集朝野之名流
研宗教之眞旨勸院會開聽之下欣羨莫名茲特公推、梁君慈果、周君根淨、李君天眞、夏君顯
誠、劉君承中、王君承宴、侯君又誠、唐君定敏、前赴盛典敬請、
賜予接待俾資觀摩毋任企禱此致
日本全國宗教博覽會

世界紅卍字會中華總會啓

○二月二十二日巳正統壇 龜岡侍

沙 實

雲

彌勒佛奉

老祖命自妙山前驛到。

沙 實

雲 實

老祖自妙山來

大道之本。惟靈是宗。靈明靈昧。修悟所憑。靈之明者。其无清。靈之昧者氣濁。因明因濁。於是世間治亂。人群安危。乃由而生己。然治者自治乎人。亂亦亂有乎人。安者自安乎人。危者亦危。自乎人也。人也弗亂。則亂無由。人也弗危。

危也無因。此大道十六字心傳。所以明乎微危也。各修者明乎是亂之安危。人群之生滅。則道之在於己身。在於人世者。可以悟其所止己。曷爾諸方。其各悟勉可己。

尋仁於去多赴華。因世亂之障惑。未能償朝母參總之志願。以聯世界之接合。而結最大之善緣。是亦數也。然於此行之增於己身。增益於大道。增益於世界者。實非淺鮮。因觀華之危。而思及其致危之由。知和之安。必悟共致安之因。危者思以救之。安者謀以保之。於是安者久安。危者亦夷。救保之道。舍教化修悟之功。則弗能以正其心。而修其身也。於此而致各方救世濟人之力。以備其事業。則各子所負之任。又豈今日共謀道慈昌明為己哉。各方善悟乎虛靈之空。無色無象。無形無聲之妙。以化除人我之見。而其悟道之真宗可己。各々勉之可也。受靈於人身。而使之撰述。與逢靈於沙木。直接之清靈。而闡道妙。雖其顯靈宣化

也不同。而其昭示於人以修誦也則一。壇下各子不可以沙木之逢靈。有異於仁子之宣述。而有輕忽變神之意也。各方知之可已。

慈果可將樂之侍道。述於各方。樂之侍壇也。無絲毫之期圖。犧牲個人之身家事業。乘至誠之心。充至清之靈。以恭侍壇。非如其他。假是而為終身之業也。

因事之未明於此者。多因此而有輕藐篡職之處。神訓之尊嚴。亦因是而被人所襲已。各々記之可也。

各方因人机之轉移。而逢乎靈机之運。似當於此處。先至東總。後再至綾部。次至阪院。詳演修誦於華修。使彼等徐々傳譯。以輸和方也。因華修各子。居和有年。言語文字皆能融熟。以彼等之所悟。而示於和。較各子惚促中為易也。但机既轉乎人事。即於今日赴綾。再總。再阪亦無不可也。各々記遵可已。

凡今日之侍壇各方。均加天靈一次。以益智慧。而固修誠。各々記遵可已。彌勒

佛正文。

各方於本院諸子。會面時。禮貌必須周詳。雖言語不通。有化子在。當能盡其指導之責也。如是方可以見兩方相誠相睦之意也。各々記之可也。文免正自校。

各方先知阪院華修。使籌一宿之借寓。以盡同修地之誼。如是則修誦之演述。可盡一日之時間。而示其要已。各々先記之可也。

壇即避之可已。
前在神院之求方者。可令共服壇水。着中子告之可也。

○ 宗教大博覽會大本特設館より

三月廿一日 (第十四日)

春季皇靈祭、空は晴れてゐるが、風が吹いてゐる。勿論平日より入場者は多いが、女子供

が七分を占めてゐる。従つて纏まつた批評も聞けぬ。
今日から開祖様の御着衣が陳列される。縮入、袷、帯、足袋等都合四點で、そゞろ昔が偲ばれ言ひ知れぬ感じが湧いて来る。

大本沿革の中聖師様御筆の大本歴史を大半見終つて、千手観音の御軸の掛つてゐる方へ曲る角に、袖垣といつた様なものを作り左の大本寸言が掲げられた。

『藝術即宗教。宗教即政治』

『時代を征服し得ざるものは眞の宗教に非ず』

『宗教は時所位により宗祖によりて多少の變異あり』

『道は單一無雜にして萬古不易なり』

宗教家らしい三人連れがこの、言を見て感服してゐた。

『ウーンこれだ、これではなくてはゆかぬ。これでこそだ。そこへ行くと因循姑息な佛教家なぞ駄目だね』

御神座を左へ曲つた右手の壁に聖師様御使用の大筆が二本掲げられた。これは『大祥殿』及『彌勒殿』といふ額を御書きになつた時使用されしものである。

『箒の様だね』と批評して數多の人が過ぎて行く。

その續きに丸窓の氣持を現はした様なものが立てられたが、こゝへは大本寸言が掲げられることになつて居る。

聖師様は龜岡午前八時發列車にて御來館。館内を御一巡の後御休憩になつた。

看守奉仕者へ御持ちの短冊を御さげ下され不足の分はこの次にとの仰があつた。

大和氏方にて御晝食後、再び御來館。御少憩の後、知人を訪問されるため御出掛けになりその儘龜岡へ歸られた。此の日寺西知恩院庶務部長來館。聖師様に御面會した。

午前中の入場者 一、一一七人。

『大本の教』のバックの最後に『白雲の外に求むな惟神誠の道は日の本にあり』の御歌を十尺の短冊形のものを作つて掲げた。

聖師様御來館の時だったが、金澤市の某老人が後藤應接主任補に左の如く語つて居た。

『私は瀬戸物を研究し且つ現在もさうしたものに關係してゐるものだが、先日金澤で出口先生の御作品展があつた時、その樂焼を見て全く驚いた。そして今日はこゝで澤山の御作品を拜見して感嘆餘りあつて辭を知らぬ。一度出口先生に御面會したいと思つてみたが、とても叶はぬこと故諦めてゐる』と。

恰度その時館内に聖師様の御姿が見うけられたので後藤夫人は老人にそつと告げた。老人は大變喜んで帽子をとり、遠くから挨拶して後藤夫人に云つた。

『何と私は幸福者でせう。何かの因縁で御座いませう。斯うして出口先生の御姿を見受けさして頂いて、私は逆も嬉しう御座います』

老人の眼には涙が浮んでゐたとか。――

入場者 五、九三一人

○春季祖靈社大祭

三月二十一日、朝の曇も次第に晴れ、麗かな陽ざしが柳の若芽にかぎろひ初めた午後一時報鼓を合圖に祖靈社大祭舉行。齋主は日出磨様、齋主補は後藤、佐藤兩氏、祭員は大島、吉原、湯淺、門脇、齋藤、飯田(能)、富山の諸氏、参拜者殿外に溢る。

八雲琴の奏樂裡に献儀が終ると間もなく二代様御出まし。齋主及齋主補の朗かな祝詞奏上が済み、玉串行事は二代様より始められ、次で齋主日出磨様及齋主補後藤、佐藤兩氏一齊に立ち捧呈し最後に東尾總務は杉田判六、安達謙太郎の二氏と共に参拜者を代表して立つ。それより二代様の御先達にて一同神言奏上、午後二時過ぎ祭典終了。参拜者は何れも直會の御菓子頂き、直ちに奥都城の祭典に参列すべく陸續として天王平に向ふ。

奥都城の祭典

奥都城の齋庭に集ふ信徒約四百、一同お祓をうけて開祖の奥都城前に参列。

暖かい午後の日かげを浴びて天國氣分に浸る。二代様の御先達にて一同神言奏上、引き續

き出口家墓前に参集し、全国信徒の墓前祭をも兼ね再び二代様の御先達に和して一同神言奏上し本日の行事こゝに終りを告ぐ。参拜者は洩れなくお下りのお神酒や御餅を頂き、随時退散せしは午後三時半過ぎであつた。

新 祭 殿 祭 典

新祭殿の祭典は天王平墓前祭と同時刻に行はれたが、祭員は佐藤尊勇氏外三名であつた。

遠津祖世々の御霊を安らかに齋き仕ふる孝き道かな

○三月二十一日 大阪經濟新聞所載記事

京都宗教博に

紅卍字會員來る

大本教等訪問す

目下京都岡崎公園に於て開催中の宗教大博覽會の觀覽へ支那紅卍字會員の一行十名、團長梁慈果、副團長周根淨、劉兼中、王承宴、侯文誠、唐定敏、孫昕光、金誠德、西川尋化、郡祥志氏等は十三日奉天發十五日午後七時五十分陸路神戸着、十八日午前十一時二十分京都驛着直ちに京都道院に入り、それより市内及博覽會を見物して丸屋旅館に投宿したが二十一日は綾部の大本教本部へ出口王仁三郎氏を訪問、その他龜岡を見物し二十五日上京の筈。因に紅卍字會員は大正九年山東省、濟南に精神運動の中心として興りたる支那の新興宗教——道院の附屬慈善團體機關として大正十年に生れたもので本部を北平に置き大々的に活動を續け去る大正十二年の關東大震災の際には米五千俵と現金二萬圓とを携へて渡來し大いに救恤の實を擧げ、また丹後の震災の際にも目覺しい活動をした等相當實績を擧げつゝあり、恰も我が國の日本赤十字社乃至は濟生會と相似の點がある。昨年九月には世界中に牛毛の如く散在する宗教中、大本教と第一に提携すべしとの神示によつて總々來朝、大本と完全に合同したもので右記告示或は境調とは一種の器具を用ひて神の意志を盤上の砂に描き出す方法で彼等の行動は凡てこの告示に絶対信頼した上定められるものである。

三月二十一日 京華日報所載記事

宗 博 よ り

目下岡崎第二勸業館に開催してある宗教博覽會に於ける電氣應用の大景觀だといふ地獄極樂の所謂組畫人形や金ピカの觀音佛三十三体並べて三十三ヶ所の巡禮觀音に仕組み御詠歌をあげて觀覽者から入場料の他に篤志とはいひ乍らも賽錢をばつたくつてゐるなどは何處から考へても田舎者だましのそしりを免れぬが、それに續つて第一宗教館に出品の統一に依つて觀覽者に能く理解の出来る大本教、本館の出品に高華華麗な天台宗御儀法講や壯嚴や出土後一卷に裝クワリされて大谷光瑞師が出品の有名な燦爛出土の善導大師眞筆阿彌陀經は斷經雪墨も燦然光を放ち市立商品館階上に出現の善導大師眞筆仰展には國寶其他の曼陀羅が多数を占めてゐるが、特に當時曼陀羅の下に中將姫筆の放書淨土經の出現などは何れも見ものである、因に世界紅卍字會中華總會々長梁慈果氏等幹部十名は十八日午後三時宗教博覽會のため大本館に參觀し、井上大本總裁其他と共に同館及本館を限なく觀覽したが快舉に口を極めて讚歎したと。

三月二十一日 大阪今日新聞所載記事

支那紅卍字會員

宗教博覽會に來訪

綾部龜岡を経て上京

梁慈果氏以下十名

支那紅卍字會員は三月十三日奉天發、十五日午後七時五十五分陸路神戸着大和ホテルに投宿、十七日まで神戸に宿泊してゐたが、十八日午前十一時二十一分京都驛着、直に京都道院に入り少憩後午後二時より岡崎公園宗教博覽會を觀覽、仁王門通り丸屋旅館へ投宿、十九日は博覽會及び市内を見物、以上京都三泊にて午前八時二十一分二條驛發、綾部大本教本部を訪問、二十一日は綾部に滞在、二十三日は龜岡訪問、廿四日は龜岡出發午後京都に入り廿五日午前十時上京する。同會員の渡來の目的は宗教博覽會及び出口王仁三郎氏に面會の爲で同會は大正九年山東省濟南に精神運動を起したる支那の新興宗教にして道院の附屬慈善團體機關は大正十年に生れ本部を北京に置き大々的に活動を續け去る大正十二年の關東大震災には米五千俵と現金二萬圓を携へて

渡來、大いに救恤の實を擧げ、又丹後の震災の際にも目覺しい活動をした等相當實蹟を擧げつゝあり、恰かも我國の日本赤十字社乃至は濟生會と相似の點がある。昨年九月には世界中に牛毛の如く散在する宗教中、大本教と第一に提携すべしとの神示によつて益々來朝大本と完全に合同したものである。

◇三月二十一日 中外日報編輯日記の斷片

△宗博の大本館に十分間樂燒の陶器店がある△或る失戀青年の對象美人が主として働いてゐる△友は一輪いけに「壺中天」と書いた、赤いダリヤを挿して病める娘の枕頭に△我は「松風十二時」と書いた、阿呆の一つ覺えだと歸つて娘に笑はれた△「三千世界一度に開く梅の花」などの絶世句は今の佛教人種には書けないネ。

◇三月十一日 兩毛織物新聞所載記事

出口大本教主の

作品展覽會

來る十五、六兩日に亘り

桐生俱樂部で

人類愛善の大義を高唱する大本教の教義を遵奉する人類愛善會兩毛支部では來る十六、七兩日午前九時から午後五時まで桐生市高砂町桐生俱樂部に於て教主出口王仁三郎氏作品展覽會を開催する事になつたが出品は同氏の作になる書、畫、樂燒等神韻こもる逸品揃ひであり、十日各方面に對し左記招待狀を發した。

謹啓 春陽の候益々御清榮奉賀 陳者今般人類愛善會總裁出口王仁三郎先生作品展覽會を左記の通り開催仕候間御多忙の折柄恐縮に存じ候へども萬障御繰合せ御來觀の榮を賜はり度此段御案内申上候

出口先生は終始一貫神意を奉じ人類愛善の大義を高唱せられ全人類の親睦融和をはかり永遠の幸福と歡喜とに充てる光明世界を實現する爲に本會を設立しこれが總裁として日夜活動せらる。今や全世界に亘りその主旨に賛する者日に月に多きを加へつゝ有之候 先生は藝術方面に於ても亦獨自の識見を有し寸暇あれば彩管に樂燒にその天分を發揮せられその作品優に數千の多き

に達しその現表せられたるものは人物たると山水たるとを問はず悉く氣韻生
動筆致縱横眞に天賦の靈感を迸出し神韻縹渺一見直ちに先哲弘法大師を偲ば
しむるものありとの評も強ち溢美の言にあらずと存ぜられ候
吾等茲に見る處あり未だ公開の機を得ざりし先生の作品を懇請し廣く江湖
諸賢の高鑑を仰がんとする次第に御座候 敬具

三月廿二日

於 宗教博大本館
高天閣

暖かき春陽神苑に輝きて心長閑けき今朝の空かな
紅卍字會員大祥殿に入り老祖諸神の扶乩ありけり



同日訪會字出紅那文と御聖口出

壇訓を終りて一同高天關玄關に立ち小照を撮る
月宮殿参拜のため一同の案内したり午後一時前
大本館沿革の畫圖懸替へのために京都をさして上りぬ
陽炎のもゆる春野を一時半閑月卓子雄月つれ行く
溪川の流れば頼に淺みければ水清くして底の見えつゝ
歌の書を読み耽りつゝ知らぬ間に嵯峨の驛路に早つきにけり
嵐山春まだ淺く花園の驛に走ればもゆる陽炎
二條驛下り自動車走らせて宗博大本館に入りけり
井ノ内氏夫妻は既に先着し表具店より表装届けり

大筆を以ちて壁紙に彌勒殿書き居る寫眞掲げけるかな
白音太拉遭難當時の大寫眞今日館内に陳列なしたり
寸暇をば窺ひ假の事務室に櫻歌の短冊四十枚かく
午後六時大本館を立ち出で、姥ヶ北町下西家に入る
一行は下西家にて夕飯をいたゞき九時迄休息を爲す
宗教博客まばらなれき今日一日に三千名の入場ありけり
幾年か戀てし人に逢ひしより猶なやましき吾思ひかな

春がすみ愛宕の山にたなびきて吾が住む家から十里遠く見ゆ

花に物思ふ夕べの淋しい私隔て住んでる春はじれつたい
あたら匂ひが鼻をつく櫻吹く風香水の髪が目に浮く夕
匂ひ飽かない櫻の花を見つめ乍らぼんやり樹下に佇む夕暮
誰かしら手折つて歸つた跡がある櫻の一枝折目が白う水つぽい
四五日の後には散り行く花なりと思つて見ればあはれつぽき哉
櫻さへ目にも見えない風には任かすそれにお前は時代遅れの事をいふ
丹波路にも櫻の春は流れたりそしてかんばんし風が野渡る
花の樹の下かげをゆくバラソルの桃色蝶の如くに飛んで潜る
もしくと大路を行けば後より美人の聲す何んだ豆腐屋が呼んでるやがる
めきくと機林が青ずんで春が梢にしつくり宿る
去年の記念枯葉を梢にぶら下げて春を待つてる機生の山
宗教博愛嬌者の鬼どのと丹波の王仁とが握手してみた

幾年か戀ひてし人に逢ひしより猶春の日はなやましく思ふ
 製材場のサイレンが鳴る音聞けば亡國的な感じが湧いて来る
 子供等が詩歌々々と懸命になるのに釣られて入社して見る
 古めかしい昔の調の歌斗り讀み來た私には見當が取れぬ詩歌
 夕暮といふ人強い引力だトウ／＼オニまで喰つて了つた
 吾詩歌は没になるのは覺悟の前田いづれれ下手だと夕暮の作
 今年はいよ／＼六十路に踏みこんだされど意志想念は二十七八
 バイアルの頁を繰れば干からびし去年の櫻も新しく匂ふ

○

一年に一度の春の眞盛りをどめまほしき山櫻哉
 吾妹子が織りし横縞の羽織きた美人の袖に匂ふ花の香

吉野山花老ぬれき二三輪下枝に残る色香床しき
 花便りきくこの夕べなんどなく靜心なく思ふ妻かな
 眞實に効験のある支部なれば引張風で飛んで行くなり
 あちこちの人が出て來て書畫々々懇請されて困るこの頃
 人間は二本の腕より持たざれば一々應ずる暇ぞ無きかな

○作歌 盛花の部 (四十一首省略)

○庚午正月初四日午正統壇

父 誠
定 敏 恭侍

孚聖奉

命判一目

為極弟子顯誠、天真來函內稱日本京都
籌設宗教博覽會道院可否加入該會伏乞
明訓示遵

即速電母總。以請明訓。而示統系。但各地之院會神人成績。所有著作書畫。及經訓各品。當即由本院先行通知各主省特埠院。一体將其佳者。彙寄本院。以作如期與會之備也。然各院之堅誠昌道各方。必於此機。共往參與。以增見聞也。惟院之沿革。院之說明。與主旨工作等。當與會者同撰梗概。以備宣傳也。各各先記之可已。

○正月初九日午正統壇

孚聖奉

命。宗教聯合。倡導於日邦。雖云事屬偏隅。然亦大道昌明之一機也。昨經樞府會議。擬由品人事徵文說圖畫。以表彰道與教之異祠同原之理。或為文以引申之。或為畫以表顯之。寓意假借。各得其妙。務使與斯會者。觸目而有所驚覺。稍研即明教之本源。如是所謂修道而為教者。不於圖畫中以顯示其義。即於文說中流露其機。凡視此者。憬然知有所悟。慨然知有所致。則世界道德團體之聯洽。乃能以為世界人類共享安樂。共享熙皞之胚胎已。各方當於此機。分作內外。一為外徵。凡非人修具有是項道與教不同其軌。而同其原之作皆以合於徵文之旨而獎之。一為內徵。同修各子。除與外徵同作外。再加以本院之某年創始立幾院。以次逐年詳核列表畫以明之。再入修之人數。亦如上表畫之製作。再慈業之慈款

之收付。以作某項慈用若干。某項善用若干。亦同上表畫而著作之。一院者如是各地院會總少是項成績。而為一總表畫以表之。如觀一隅之分。則視各院。欲觀院會創始以迄於今。則視其總。是不特可以見道慈進展之急緩。亦可以見修於道慈之人材也。各方知之有作如是者。亦必以獎之也。獎之之法。除與以金質獎章外。再以其一二三等之差別。獎以金也。各々悟遵可已。其有未明是義者。豫以式。着定敏以畫之可也。畫天海。海鷗數舟。舟者以示各教。海水則為道耳。或作一發電所。所即道之原。凡藉是電而為種々之工作者。皆教也。或作一地圖。山有其主脉。主即道之原。輪即教之分。江有其源。源即道之始。分流合海。以示教之分歸也。如是而各悟其意。各研其妙。則圖畫文說之現於世界。使人而覺導人而修之功。其果不啻以廣長舌而說法也。各々記遵可已。

○正月二十一日午正統壇

濟佛奉

予命。顯誠天真之在東瀛也。於道於慈。增無量之進益。是雖兩子宣化之功。亦大道昌明之一機會也。宗教博覽之創舉。不可以狹隘視之。當以廣大之光普照之。大道既無所不納。當然無所謂有欲有不欲。凡屈已以待人者。人始能以沐其德濟已。惟以華之處境。與彼不同。不同聲而大鼓附和之則可。而昌道明慈之舉是不可止也。

奉

予命即知母、總、津、檢、及各主院。與東北各院會。凡負有昌大道以大同世界之志。明仁慈以極胞與之苦者。均宜參與日本之宗教博覽會。雖個人之旅費有所稍糜。而於個人之修功。大道之進展。實有無限之增益也。亦即誠真此次佈道

於和之獨得玄妙。而凡參與者。亦均得之也。各々於接訓之後。是否參與。當知
潘院。以便屆時會齊前往也。各々知遵可已。 /

○二月初四日午正統壇

尙真人奉

子命。各赴和者。抵神後即行請持統總訓。各々知遵。 /

此次華士各院會之不正式參加該博覽會者。非有他意。乃因參加博覽之各項作品
一時措備不及。如其不完不備。莫若闕而不列。以處賓位也。此應將前所示及之
各訓。檢輯成快。以便向尋仁等詳述一切也。果淨等知記之事也。 /

各方至和。於參觀畢。當先至龜岡綾部。兩處一行。一所以謁尋仁承仁。以敦同
修之誼。而厚中和之處。並因是覽彼勝地。以悟鐘靈之機。而大道之在於人世者
之玄也。各々知遵可已。 /

○二月初十日午正統壇

孚聖奉

子命。世界出總章第一二號。一送華總。一送日總。三四爲誠真。五爲弘濟。
廿四爲永明。其中者以各赴日諸子分之。職齒分則。由六號遞唱。以誌記念。並
爲世界出總之根。立一根基之初級也。各々知遵可也。

功行所在。生機日昌。生也者仁之本也。昌也者慈之運也。以功行之卓著而放
光明於大道者。是惟在爾修之者之一堅一恒。以悟其所以已。此次誠、真、化、
道、四子之赴東也。於是中而建其是功。於非中而悟乎幻非。弗以滯而失信於迷
不以圓而果道於非。是皆於個人之誠明一悟。觸機而通之也。故曰信道爲明德之
上。信也弗誠。則信失其本。誠修爲悟行之本。誠也弗明。乃昧其真。吾於此四
氏赴東之行。未或有異於是也。是皆在各修者之能以明其明。與弗能明其明耳。

各々善悟是義。以參乎大道平易之本。則世界之在乎我者如是。我身之在於世界者亦如是也。最爾諸方。其共悟之可已。各々遵旃。並知各院。四子赴東夾日之功行可已。知遵。 / 奉

命判一目

弟子天眞穎誠等東渡任務終了對於募

服事日方弟子頗具熱誠已由弟子神吉

負責積極進行一俟積有成數即行專員

送潘板價亦同時解送擬藉赴日參觀之

便恩賜調獎日方出力各弟子以資鼓勵

之處伏乞

判示

悉所請乃道之正軌。極應如是。除以各地院會之堅誠重要首領外。均兼日本總院會之名譽職也。並以日之名譽職。而並兼中華也。其名譽之等差。以各該院會之職爲定耳。各々記遵可也。 /

(註)

本應如華土之獎以何實。惟因情與勢兩不相同。是不能不暫耳。 /

二目

爲購置印刷機器已在大阪詳細視查並承日方重要

弟子先負代購及切商緩期交價與遣派委員來港指

導各責似已有具體辦法應如何進行之處 伏乞

判示

悉是當根據前議。先定此項事業之根本。再行進行籌購一切。乃爲得體。不然購備之舉成。而吾之大基未定。其將何以處理。是不可不慎重之也。知記之。速行詳研。以便知前次之共計者。而進行之可也。 /

三目

弟子天眞穎誠等此次在日奉訓成立院會地點

另單恭呈惟懇每院各賜四字以便挑名伏乞

判示

即將各成立院會之地址。及負責之重要首領。一併早母。聽判可也。因統系所關有墳與無墳之不同。是不能不於此而崇系統之正也。知遵。 /

四目

所有各院院址擬請訓令弟子尋仁按照院職
統系由人事推荐造冊具報母院呈正後分別
製籍既免擾神靈而又厚日方弟子之信仰可
否之處伏乞

判示

悉。所有各院之職。均准遵前訓。由尋仁以靈界之明慧。而指派可也。並知母備
籍。各々知遵。

五目

爲古曾部與熊本兩院因國情不同該首領皆係女修
似與院章不合以懇特恩准予襲母職以維現狀惟
女修首領及各院女修職員在女社未成立之前先以
社職代行院務可否之處伏乞判示

悉。准如所請。大道之行也。天下爲公。公之所在。自無別乎陽陰。而世之分形
授物。變化雖有不同。則公之爲道。又有何殊。是當順勢依情。而爲之導也。知

記之可已。

六目

日方弟子信仰頗深凡此次設立院會之處擬懇
按照開院特
因以分別獎勵以勵進修伏乞
判示

是當遵院之獎。而擬定晉級外。並以各有力者。均兼華院社之職也。但華院社以
母總主之地爲宜也。各々記遵。如誠真四與。能記其詳。叩於主院推擬亦可也。
知之。

七目

爲有田道院弟子久富三六恭呈細磁瓶一椽舞鶴
道院弟子梅垣明澄恭呈刺繡緞一方應在何院恭
陳伏乞
判示

是當以統系所屬。由主而晉呈於總。以尋其源。始可以其表供獻者之心也。獎否

再聽後訓可已。各々記遵。此致尋仁宗監

瀋陽道院謹抄

○宗敎大博覽會大本特設館より

三月廿二日 (第十五日)

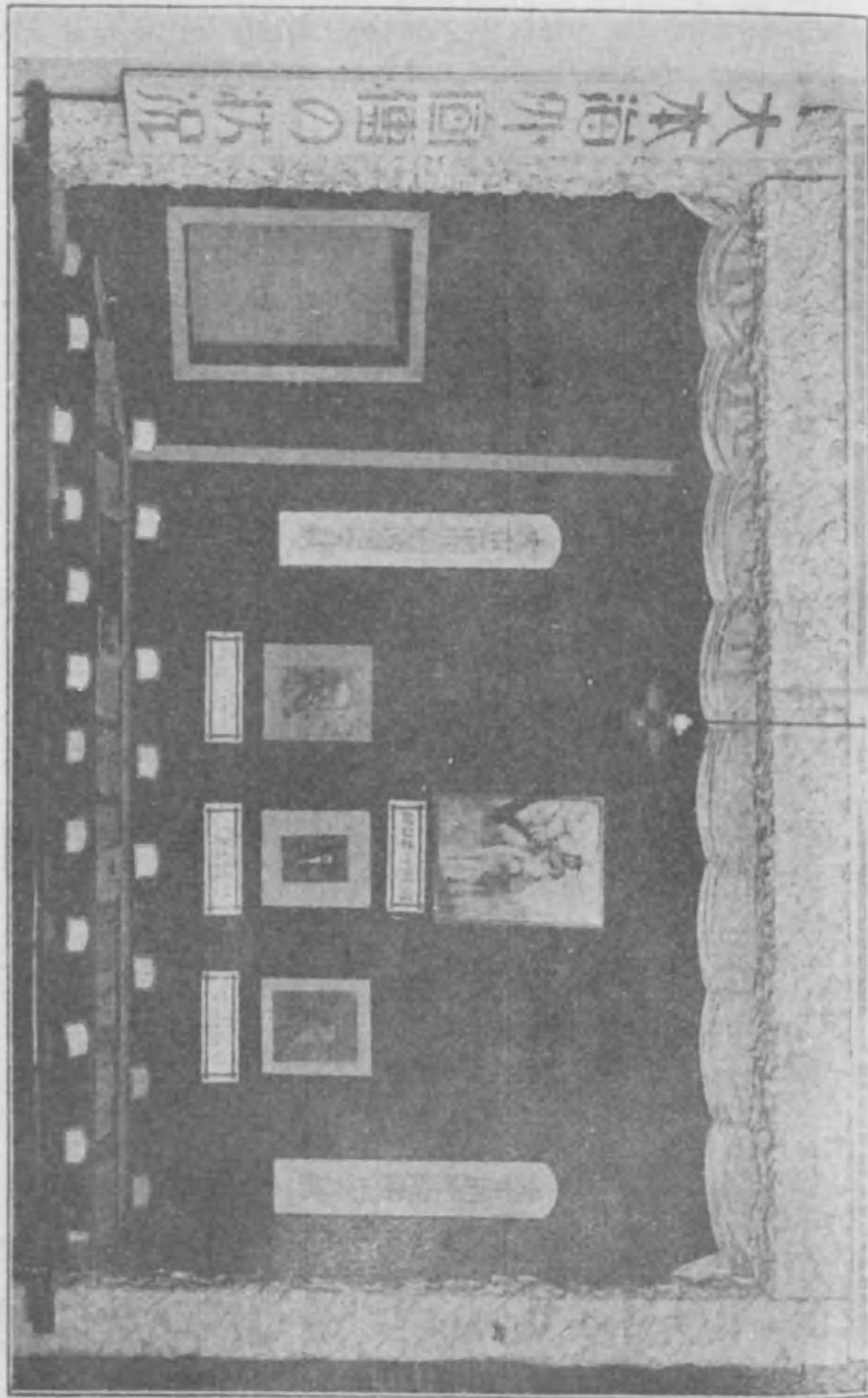
午前十一時齊藤朝鮮總督來館。詳細に館内を一巡後本館へ。

快晴だが人足は少い。

午前中 五二五人

正午過ぎ臺灣總督府地方理事官商雄州内務部勸業課長李讚生氏來館。記念樂焼に興じて本館へ歩を向けた。

午後二時半聖師様御來館。大本歴史の畫十幅御持参になり、閉館後掛かへることになる。



眞寫念記衆人師聖は上(九其)内館本大博宗

聖師様御使用の大筆の下へ二三日前大祥殿にて『彌勒殿』の額を御書きになつた時の御寫眞を掲げた。

李讚生氏再び來館。聖師様に御面會後辭す。

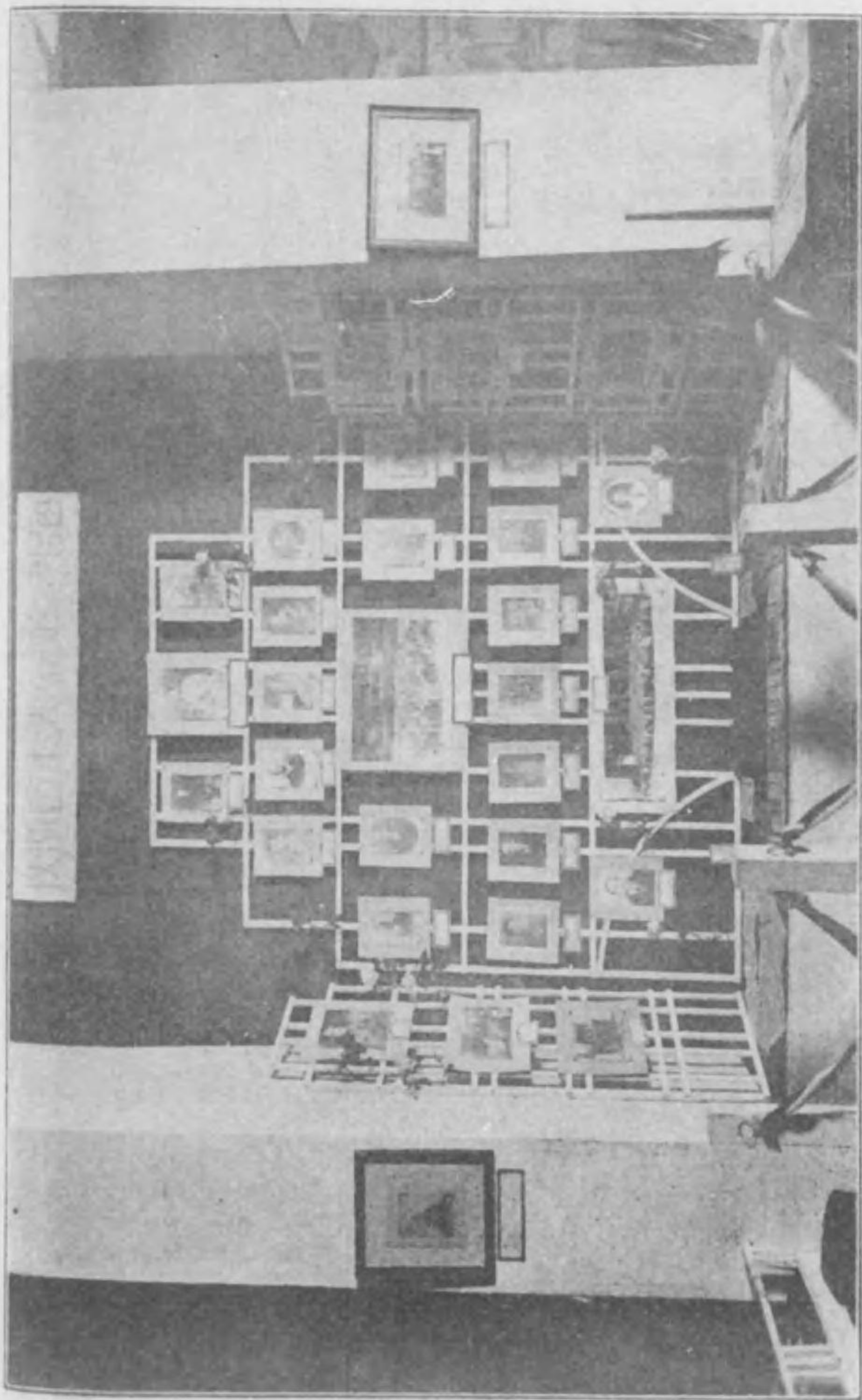
聖師様は控室にて御短冊を御染筆になり昨日洩れし人々にお下げくださった。

閉館直後聖師様御指揮の下に大本歴史書の掛かへに着手す。

此度の博覽會に聖師様度々御來館下され、自ら出品の御指導に當られるのを見ても如何にこの博覽會が重大なる意義を存するかは何はれる。

地方の方々はより一層の御援助を下さつて多くの觀覽者を、この博覽會へ御送り下さるやう重ねて御願ひする次第である。

大本歴史のお軸掛替へ後聖師様御持参下されし、入蒙當時支那軍の刑場にて一行が足枷に繋がれてゐる寫眞を『大本沿革』中入蒙關係の部分へ陳列した。當時を思ひ出で、感慨無量である。



使傳尊宣教信大本内館本大(十)其に於ける大大本本信教宣傳使

午後六時二十分聖師様自動車にて下西氏宅へお越しになつた。
入場者 二七三〇人。

◇三月二十二日 昭和日々新聞所載記事

絶対的に信じる

砂上の『神の意志』

支那・紅卍字教の占示

去る十五日夜神戸へ着いた支那紅卍字會の一行は目下京都で開催中の宗教博を見物した外、日本の有識者と會見、不思議な占示などを見せたが、本日は丹波綾部の大本教本部に出口王仁三郎氏を訪問、廿五日上京の豫定である。紅卍字會は大正九年山東省濟南に、精神運動の中心として興つた新宗教

團體の附屬慈善團體で、日本の赤十字社や濟生會と趣が似てゐる。北京に本部があつて、關東大震災の際には米五千俵と現金二萬圓を提へて渡來救恤に當り、丹波震災の際にも亦活躍し、昨年九月には大本教と合同すべしとの占示で完全に提携した。此の占示または壇訓とは、一種の器具を用ひて盤上の砂に神意を示す方法であつて、彼等會員の行動は凡てこれに従つてゐる。

◇三月二十二日 京都日出新聞所載記事

大本教が園部に

中學を建てる

園部公園の一部に

明六年には開校を見ん

大本教ではかねてから本部の綾部、天恩郷龜岡、または兩者の間にある園部三町のうちに中等學校を設立したい希望があつてより、研究中のところ園部町では最も熱心に賛同し町より官有地園部公園の一部を拂下げ又は永久貸與の申請をする事になつたので、これが都合よく運べば明六年四月より同

地に中學校の開校を見る筈であるといふ。なほ廿三日午後一時から園部公會堂で出口王仁郎三郎師の講演會を開き同二時より右中學校設立問題に關し町有力者の懇談會を催すと。

○三月二十二日 北國夕刊新聞所載記事

支那紅卍字會の一行

宗教博覽會見物に來訪

各地で獨特の受神示法を行ふ

日下京都市に於て開催中の宗教博覽會は宗教界の劃期的意義深き催しものとして素晴らしい人氣を呼び全國の善男善女、又心あるものは勿論海外からの參觀者が續々として洛陽に詰めかけてゐるの盛況であるが、隣邦支那新興宗教道院の運動機關団体たる世界紅卍字會では此の有意義なる宗博參觀、兼ては日支親善人類愛善運動のために去る十三日奉天發、團長梁慈果以下十名渡日十八日京都着、同時公園の同博覽會を觀覽したが、今廿一日更に豫て同教と提携した綾部の大本教を訪問し、廿三日には大本の宣傳本部たる龜岡を

訪問、廿五日東京に赴く筈であるが其の間各地で同教獨特の受神示法たる乩示を行ふと。

○三月二十二日 中外日報所載記事

宗教博覽會

羽を續げる大本教

(上)

葵 イ ツ 子

宗教博覽會は、各宗教の發展術藝技會である。其中で大本教は實行に巧く、すつかり羽を續げて見せてゐる孔雀の如く感じられるものである。

大本特設館の入口ではピラを渡す。それには「問題の大本、彼等は何を言ひ、何を行つてゐるか、見よ彼等の活動」と叫びかけて、綾部の本部附近の鐵道地圖、汽車の時間表まで添へてあると云ふ注意深さ。

場内は最初の所で、大本教が世界的な存在であることを示してゐる。海外への宣傳文を幾種類も並べ、宣傳使の寫眞を掲げ、提携團體の人々の寫眞もある。大本教を紹介してゐる各國の新聞雜誌も列べてある。如何によく平素

から意を用ひて、新聞紙の端までも保存してゐて斯ういふ所で活かして使ふかといふことに驚く。世界地圖とそれからテープを引いて海外各地から來てゐる手紙が列べられてゐる。これなどは一年に一回の便りであるかも知れないが、さもかく結ばれてあるやうに感心させられる。

見て行くうちに出口王仁三郎氏と云ふのは實に何でもやつて見たい人間でその精力と事業的才腕には驚嘆させられる。彼は通俗的な然し近代の味を持つ繪を描く。彼の軸は何幅とも數へ得なかつたが、非常に多く描いて居てこれを順に見てゆくと、開祖の生立ちから王仁三郎氏の今日までが表現されて居る。

開祖直子氏は、天保の饑饉の最中に生れてゐるし、嫁してからも娘に誘拐される。息子は大工で家出をする。後に直子氏は過度の苦しみで驢裡を刺戟して終に婿の爲に座敷牢に入れられる。破牢す。再び入れられるといふ憂き目を見て居る。彼女の書いたお筆先は約一萬冊といふ。斯程に苦勞をした人の書いたものの中には勿論眞理も含まれやうと思はせられる。王仁三郎氏も農家の生れで中々辛酸を嘗めて、俠客に亂打されたことから山へ一週間も籠つて了ふ―打たれて痛かつた―弱いことが口惜しかつた―それから世を凝視めて救ひたくなつた。この大計劃もまあ順路であつたらう。(つゞく)

○三月二十二日 北國新聞所載記事

宗教博見物に

紅卍字會員の來朝

十三日奉天出發

目下京都で開催中の宗教大博覽會見物のため支那の新興宗教團體世界紅卍字會員十名は團長梁蕙果氏に引率され十三日奉天發にて來朝するが日程は十五、十六、十七日の三日間神戸滞在、十八日京都に出で岡崎公園の宗教博覽會を見物、十八、十九、二十日の三日間京都滞在、廿一日鞍部の大本教本部を訪問、廿二日同地に滞在、廿三日龜岡訪問、廿四日京都に出で廿五日上京する豫定である。紅卍字會は昨年九月大本教と提携すべしとの神示によつてわざ／＼來朝し大本と完全に合同したもので今回の來朝を機とし大本教ではその歓迎方法を講究中である。

三月廿三日

於高天閣

朝の五時起き出で見れば竹籤に早くも雀の群鳴きを聞く
 東の空うら、かに西刺し風柔かに苑内静けし
 宇知麿は但馬の信者大會に朝の九時にて出發を爲す
 湯に浴りて垢なき身体洗ひつゝ、上りて植樹の差圖なしけり
 大本の沿革の畫を描かんぞ紺屋町月光寮に入りけり
 十枚の畫を描き終えてほつと斗り一息つけば午後の五時半
 今日も亦大本沿革畫十有枚二尺絹本描きけるかな

清月に迎へられつゝ、天恩郷高天閣に歸りて休らふ

中村の音頭の名人吉さんとお辨財天夕方訪ひ來ぬ

大本の沿革史畫は本日の十幅を合せて總計漸く六十枚の揮毫を終へたり。

○作歌 惜花 (三十八首省略)

○在東京牧野氏よりの電報 (午後五時五十二分受信)

イソギゴソワダンアル、コンヤー〇ジ五〇ブンニテユク、ヨロシク、マキノ

○宇都宮支部より來電 (午後七時四十分受信)

聖展開催御禮申します。 入場九一五名。

門司より 壽賀慶明日神戸へ大和丸にて着との來電ありたり。

○宗教大博覽會大本特設館より

三月廿三日 (第十六日)

氣持のいゝ晴の日曜ではあるが案外人出が少い。春の郊外へ足が向くせいにか—。

福知山の人で美術學校の生徒が、大本歴史の書を見て、開祖様をなつかしんで居た。同郷の氣持が胸一杯に擴がつたのだらう。そして『また來ます』といつて去つた。

十九日に來館した亞米利加人の夫妻が通譯を伴れて昨日も來館したとの話を聞いた。

昨日立てし開祖様御使用物陳列の前の丸窓風の袖垣へ左の大本教旨が記された。

△至聖大賢新民の稱ふる所神眼之を視る未だ全美を盡さず。況んや其他に於てをや。故に先哲の靈、後人の魂を守る能はざるは必定なり。

△省、恥、悔、畏、覺の五情、靈魂中に含有す。乃ち神明の戒律なり。末世職無く妄りに戒律を作り、後學を眩惑す。實に神府の罪奴と謂ふべし。

聖師様は以上の聖言を『宗教家のために』との仰せがあつた。

聖師様御染筆の大幅及び半切の寫眞頒布を始めた。場所は御作品展の末尾である。

入場者 四四九六八

▲大本館の挿話

先日から愛善會出品地球儀の背後の黒バックに白マキの片假名で、

『世界中の人達は皆神様の御子で、お互は兄弟だから、兄弟喧嘩をやめて仲よくしよう』

といふ意味が記されてゐる。恰度來館したまだ小學校へ通つてゐる仲のよくない兄弟がこれを読み、歸宅後、喧嘩をやしたのでそのお母さんは大變喜んでゐるさうである。

○三月二十三日 開祖御遺言

◇三月二十三日 關東新聞所載記事

多くの信者からは

神か人かと

敬慕されてる

出口王仁先生作品展

人類愛善會總裁出口王仁三郎氏の作品展覽會を開催される事となつたが、會場及趣旨は左の通りである。

◇會場 宇都宮市縣廳前 商品陳列館階上

◇會期 三月廿三日廿四日廿五日 毎日自午前九時至午後五時

◇講演會 三月廿四日午後六時三十分より 縣公會堂

出口先生は終始一貫神意を奉じ人類愛善の大義を高唱せられ全人類の親睦融和を圖り、永遠の幸福と歡喜とに充てる光明世界實現の爲め、曩に本會を設立し之れが總裁として日夜活動せらる。大正十年大本事件以來世間一般の誤解する處となりし事あるも今や日本内地は勿論海外諸國の名士の諒解し信

頼し來る者日に月に多きを加へつゝある今日、本縣宇都宮市に於て書畫、樂燒等總裁の作品展覽會を開催し藝術方面より總裁の何人たるかを諒解して貰うと言ふ趣旨である。なほ觀覽者感想所見一東を紹介すれば、

一、出口さんは繪を心で描かれる。

一、習はずして書ける繪ではない、樂燒でも素人であんな色が出るものでない。

一、出口といふ人はこんな人とは思はなかつた、今迄の考へが違つてゐた。

一、出口總裁の筆跡は弘法大師に酷似してゐる。

一、達磨の立像は月樵以上である。

一、色彩と墨色の濃淡は畫家の及ばぬ技術である。

一、素人臭い所もあるがとても専門家でも眞似る事の出来ない所が随分ある。

一、八十歳にして今日初めて佛の魂の顯はれた繪を見た。

一、綾部からなんと偉い豪傑が出たものだ。

一、些かの技巧を弄した處がない、天真爛漫そのものだ。

一、技巧がどうか繪がうまいとかいふ様では駄目、その心、その靈を觀て貰ひたい(などと我が事の様につぶやいてゐる人もありました)等々々々。

三月廿四日

於教主殿

朝の五時過ぎより今日は起床して聖地歸りの準備にかゝる
 いそがしく旅装も軽々整へて自動車馳らせ停車場に行く
 閑月と竹内女宣傳使伴ひ七時八分發車す
 三十年の昔思へば月籠の相違感する小北の山かな
 四方の野は春めき渡り山裾の櫻の梢ふくらみ初めたり
 入木園部殿田を越えて胡麻の驛上ればそろく霧晴れかゝる
 山の色何れも春の色そひて花待ち顔の丹波の朝かな

和知川の鐵橋渡れば和知の驛過ぐれば又も和知川鐵橋
 矢の如く弓の鐵路を下り行く汽車は早くも山家にくだる
 山家驛過ぐれば遙に鶴山の穹天閣は雲の間に浮く
 和知川の水清けれと瀬を浅み斑らの砂利の春陽にきらめく
 一本木田の路行けば掬水莊庭に小女郎がハンカチを振る
 漸くに綾部の驛に八時半下れば宇知鷹但馬ゆ歸る
 都合よく出逢ひしものと自動車に同乗しつゝ西門に着く
 西門に高木内事や日出鷹や大本役員立ちて出迎ふ
 一二三子の三年祭に玉串を奉りけり金龍殿にて

金龍殿祭りもすみて出口家の靈殿前に太祝詞宜る
 自動車に二代は乗れど吾は又車嫌ひて山籠にのる
 教祖神御前の拜禮相終り輪王姫の墓に詣でし
 本宮山庭の小松を勞士等と切り抜き汗に身をぬらしけり
 東より牧野氏來り例の如滿蒙問題語りてぞゆく
 紅正字一行午後八時すぎ聖地を立ちて東に向へり
 ○作歌 落 花 (百六首省略)

○作歌 歌

春の日を楽しく過すも山に野に櫻の花の匂へばなりけり
 麗人と嵐の山に花見ればそつと笑顔で袖曳く友かな
 誰人も知らじと麗人誘ひて花見る夕べ立つ噂かな
 いつ迄もとゞめたきかなこの春の主と匂ふ櫻の花の香
 吉野山花を見るこそ人の前夕去り來れば外に花あり
 たまさかに吾妹と吉野の花を見し夜半には神の雨に濡れつゝ
 かすみ立つ春野に二人佇めば花の香清く風匂ふなり
 嵯峨の奥小倉の山の右左歌人ならぬも花にたゝすむ
 何ものか吾袖引きて動かさぬ思ひするかな花匂ふ山は
 春の日の名残とゞめて散る花のあと青々と山に翠す

○三月二十三日(舊二月二十四日)午正統壇

沙 寶

雲

彌勒佛奉

命自妙山荷驅到

沙 寶

雲 寶

自妙山來

弭世界年殘勝殺之禍。謀人類愛善熙皞之福。果以何道而致其功哉。曰中道而已中也者。天下之正道人世之定理也。大則無所不包。細則無微不入。不偏於己。不滯於人。以自然而行大化。以公正而修動藏。故其為用也適。而其守體也恬。

所以能育能化。而為平易無為而無不為之大道也。以今之世而推其未來。其所以能和人群為一體。使世界如一家者。舍大中之道外。無由而致其效也。各修既以世界之和平。人類之幸福。為相倡。於世之人我。象之彼此。是不能不深研其極取其中而為大同世界立一久固之基也。各々悟之可已。派運靈為大和中央主院責任宣靈統掌。即日就職。下望授籍各々知遵。(運靈即日出塵也)

運靈生有自來。繼尋仁而佈大同之法要於世界者。汝負責甚重也。然尋仁為固基之時代。汝為展佈之時期。固基也雖難。其實至易。展進也雖易。而其實至難。因固基之時。堅忍而信守之即可已。開展也則大異於是。必順時代之潮流。合人心之趨勢。以道之自然。就人心而正之。以道之平易。就人心而導之。夫然後世界大同之真境。乃可以現已。不然。以我之所倡。而統一世界宗教可乎。以我之

所行。而化時代之宗教可乎。時代即有不同。宗教又有背向。人心並有違從。是非以無大不包之中道。而集研於世界各教之所宗。不足以化除宗教門戶之見。道德畛域之別也。此大道所以合於佛。合於回。合於道。合於耶。合於儒而共參其精微奧義。以為世界人類互愛互善大同和樂之本也。

汝既承道運。宜斯變化。是必當放眼光於四海。以悟大同之妙机。着智慧於人群而悟大道之玄諦也。運靈其細悟之可已。

凡侍壇男女兩修衆。均極虔誠。是屬可嘉。然靈化之與人群。今日藉此沙木之現化。亦足以使有修志者。而悟其玄妙也。各超祖靈一二三五代。以示各修者功養修候之弗同也。各々記之可也。

世界出總之章。弘濟以下。為性真、慈果、根淨、承中、承冥、父誠、定敏、神吉、晰光、尋宗、誠德、尋化、而已。餘者以俟机到時。再為示之。各々記遵。

各方由總至阪後。於庚一必隻身苦行來綾即幕。再行直赴安院也。一所以表各方無人無我之真誠。二所以見本院之所長。取而以為法。知本院之所偏。研而取其中。三所以因机運之移。有寓手趨避也。各々記之可已。

彌勒佛正文

各方設書壇。着慈果、尋化、尋宗、神吉等。與運靈研述訓意。餘者各方。刻備書壇。接待也。各々知遵。文免正自校。

敬啓者天眞等猥以假身恭齋
聖像封疆悉化

道岸誕登五千紀前兄弟重逢喜可知也兩閱月間骨月相待樂

何如之敬維

功候恬適

動息中和翹首

慈雲傾心敷露天真等拜別後即於六日午後七時安抵瀋院記

庇無恙請釋

錦懷至於種切蒙

愛之處氣異无同不敢言謝以自外也惟冀

時錫金玉俾作章紘大道無封寸心是盼專肅謹佈下悃祇候

台綏種希

圓照此致

承仁社長

天眞
穎誠
宣道

拜啓

三月十三日

○宗教大博覽會大本特設館より

三月廿四日 (第十七日)

岡崎の春はいよ。柳がすつかり芽をふき出し、櫻が微笑む時も近づいた。

暖かさが人を家から追ひ出す。博覽會にもポツ／＼人足がふえて来た。

午前中の入場者 四四二人。

西村應接主任義弟歸國の報あり、哀悼の辭を捧ぐ。

本日聖師様から館内一同へ樂燒券を下さる。

入場者 二二四〇人

◇三月二十四日 丹波毎日新聞所載記事

本元の綾部で

王仁氏の作品展

KA美術主催の下に

四月一日から三ツ丸で

藝術は宗教の母であると主唱し、天才往くとして可ならざるはなき出口王仁三郎氏の餘技中最も光つてゐるのは、繪畫である。最近その筆勢は、いよ／＼奔放に奇抜に剛膽な進境を見せて來、本春大阪白木屋、東京上野美術會館における展覽會に於て、その眞價が社會的に認識されて來た。之を地方に紹介すべく綾部KA美術協會主催となり、本社後援の下に四月一日より、五日まで綾部町三ツ丸呉服店樓上に於て作品展覽會を開催することに決定、王仁氏も大いに氣乗で、會期中が大祭であるにかゝはらず會場に出張して席上揮毫を快諾されたので、開期中は多數の來觀者を引きつけるであらう。

素人畫の展覽會を彼方此方に開かんとする王仁の作品

三月廿五日

於教主殿

朝晴れの庭に散りしく八重梅の匂ひ高くも吾居間にかをる
池の面に散りて浮べる梅の花の溜りにかをる春の朝風
紅々も千葉梅の咲きほこる木下に犬の仔二つ遊ぶ朝
東京より小倉の山の件に就き堀米義人氏來訪ありたり
三つ丸で聖展會の事に就き飯田翠氏訪ね來にけり
筑紫嶋に永らく病みし壽賀慶は今日目出度くも無事に歸綾す
高知より足立氏其他十數人修行かた／＼參綾を爲す

本宮山檜の木松の木切り揃へ移し植ゑたり宮跡の周圍に
 昨日今日鋸鉄使ひたる腕痛み出し苦しき夕暮
 宇知庵は午前十一時五十八分綾部發にて歸籠の途に就く
 共樂館藝妓芝居に玉枝つれ午後六時より福祿壽行く
 毀たれし宮居の趾のそのまはりに檜を植ゑ込みぬ勞士と共に
 鶴山に登りて見れば檜の芽は一寸斗り萌え出でにけり
 二三寸に芽の伸びるのも束の間と思へば何か可笑しさの湧く
 この春は宗教博覽會のため自然花見る事の多からむ
 久し振り綾の聖地に歸り來て心の落つく夕べの春の日

北海道に出張したる田中使の母堂に對し宣傳使を任せり
 田中氏ゆ恩命拜受有難し母昏睡依然この返電
 隣り家に櫻咲けりと聞きしより近づき見れば遅梅の花
 夕暮の空が泣きさうな顔してる花もそろく笑ふ春日に

○宇都宮支部來電

『聖展會本日入場 一五三四名』

○作歌 夏の部 (五十首省略)

○宗教大博覽會大本特設館より

三月廿五日 (第十八日)

朝空を飛行機が一臺飛んだ。

午前十時、明光支部長濱水寅吉氏他数氏の案内にて、對馬から六十名の団体が上村照彦宣傳使と共に來館。

本館一巡後神谷氏案内にて大本館内を詳しく巡る。一同の面には感激が溢れてゐた。猶一行は京都一泊。明日龜岡へ向ふ筈。

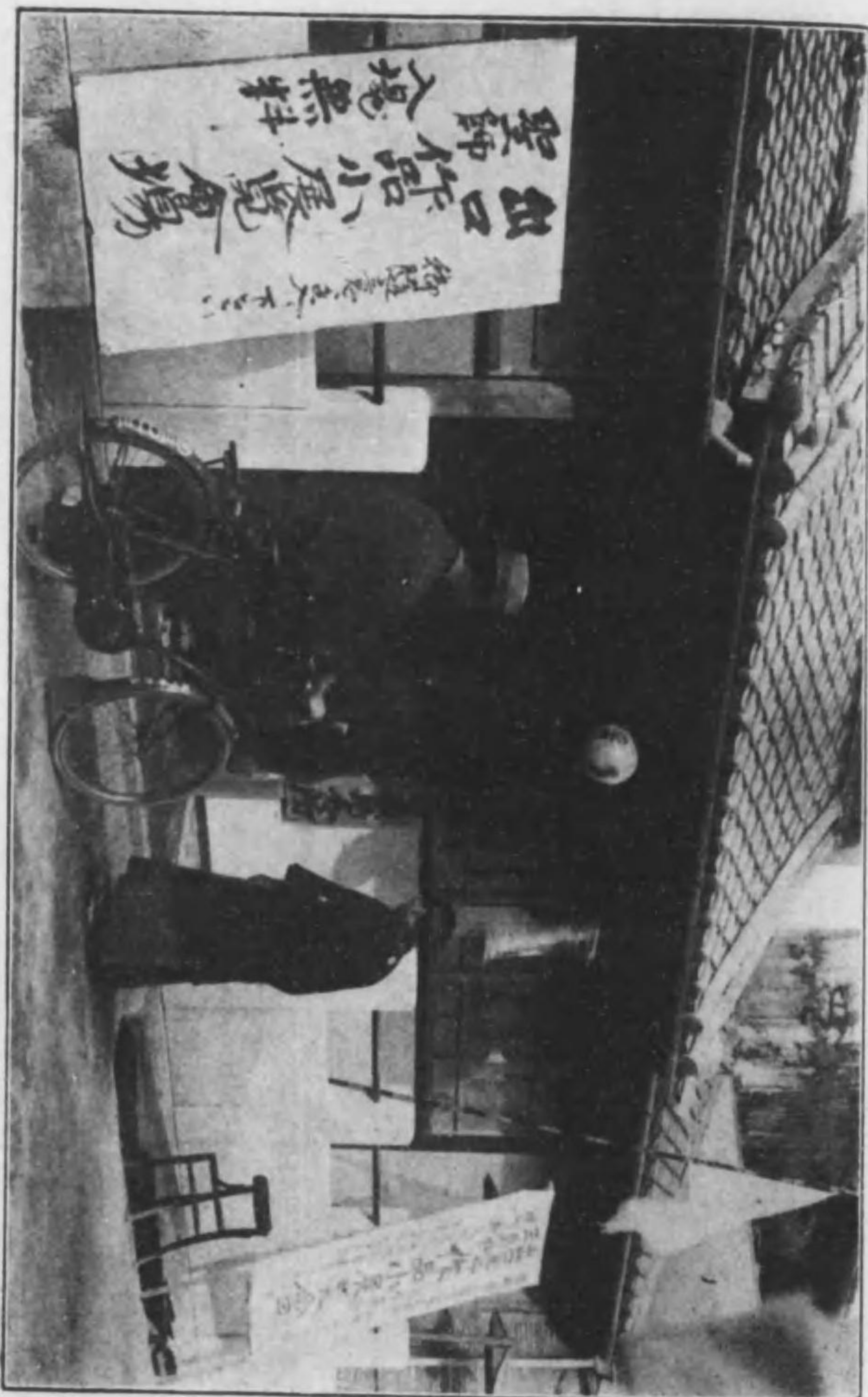
聖師様御筆の日本歴史書を見てゐた人が看守に突然云つた。

『お願ひです。この歴史書をどれでもいゝ賣つて頂きたい。どうぞ御願ひします』

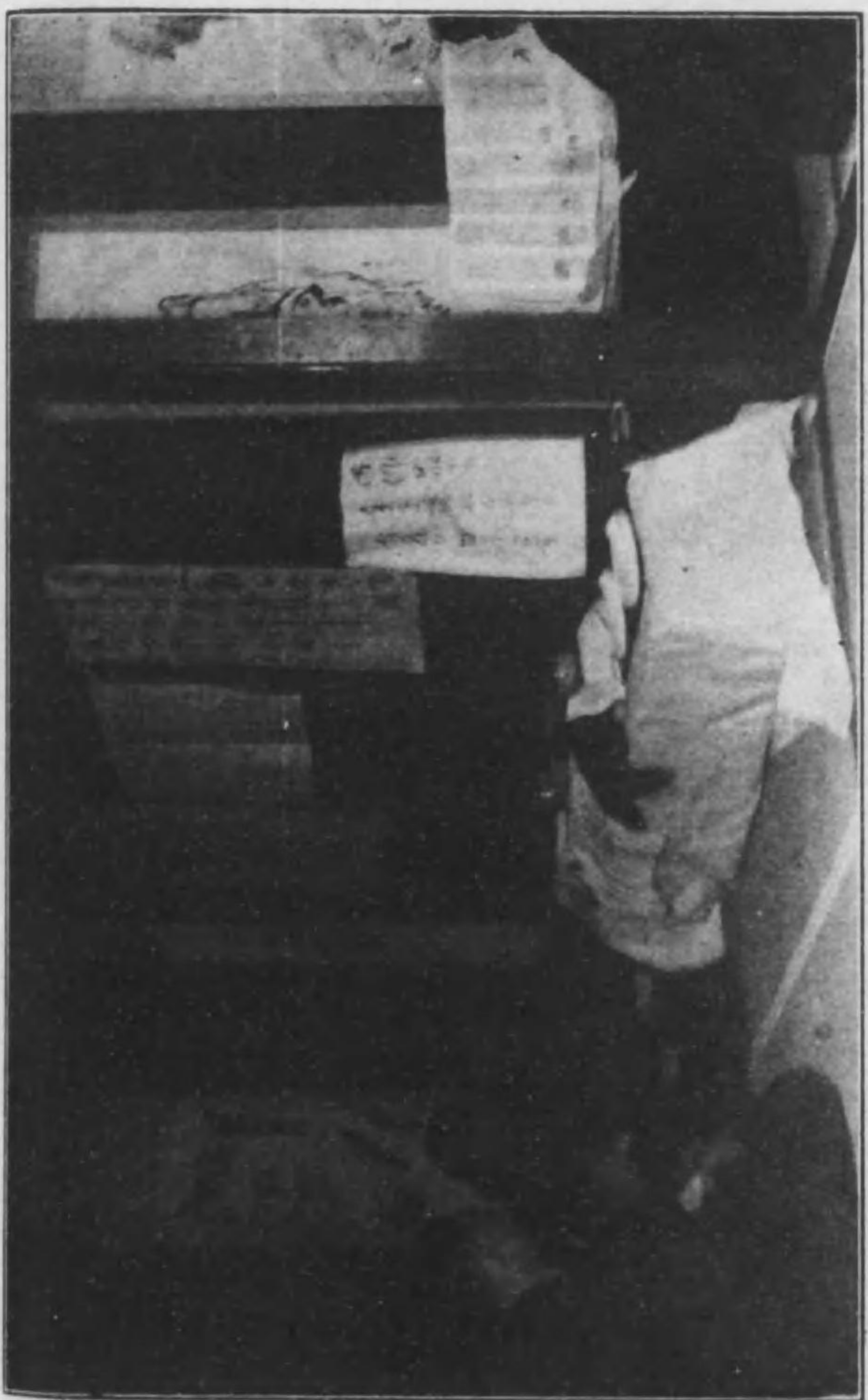
併し非賣品といふ看守の言葉はその人をいたく失望させた。立去りかねてか暫く其處を動かなかつたのには一面氣の毒さを思はしめた。

明光社の黨が破損して一時焼上げが出来なくなつた。

入場者 二六一五人



山口聖師作部小展覧會場



○三月二十五日「真如能光」掲載記事

御作品展

▼廣島市

二月廿三日より七日間毎日午前九時より午後九時まで市内袋町鯉城支部に於て開催。同支部は市の中央に位し位置は甚だ好適なるも会場としては未だ充分ならざりし處、全支部長南靖雄氏の希望により、支部を改築して展覽会場にあてられ、會場の不便を感じる折柄多大の便宜を蒙つた。立看板、ビラ、新聞廣告等凡ゆる方法にて宣傳なしたるも觀覽者の数は之に比例するに至らず。されど一度会場に入りたる者はいづれも御作品の神韻に打たれて總裁の神格と大本の教に興味を持ち感動する者多く、一週間を通じて入場者は約八十名であつた。假御神號奉齋者、參練を約する人等もあつた。

三月二日より四日迄市内皆實町皆實支部に於て開催。入場者三日間に約七十名。近來珍らしき大雨なりしも天候を案じたる割合に入場者多かりしは全く御神助の賜であつた。三日間

共入場者の質問應答に忙しく、第三日には標草專賣局の幹部の參觀あり、將來支部へ參拜して研究を重ねたき希望者等出で好結果の裡に閉會した。
(廣島分所報)

▼埼玉縣浦和町

場 所 埼玉會館

期 日 三月八日—三月九日

入場者 第一日 一八六 第二日 一七一四 計 一九〇〇人

埼玉縣浦和町に於ける御作品展覽會のため三月六日宇城宣傳使は千葉市より來着。翌七日かねて會場と定めたる埼玉會館の設備にとりかゝり薄暮に至り全く準備が整つた。設備の眞最中特に拜觀を申出られた方が二十一名あつた。其中に元縣會議長駒崎幸右衛門氏も交つて居られた。全氏は八、九日の兩日差支へがあるので折角の催しを拜觀せずには了ふのは残念だからとわざわざ來られたさうである。駒崎氏は書畫共に相當の趣味を持つ人にて三時間も熱

心に拜觀し「實に出口さんは非凡な方だ」と感嘆久しうせられた。

三月八日(第一日) 前日來の雨止まず、風さへ加はり、その爲か人足少く僅かに百八十六名の入場に過ぎなかつたが、風雨を冒して拜觀しようと思ふ熱心家だけに、いづれも敬虔な態度で熱心に拜觀された。就中本縣女子師範學校教諭にして有名なる書家木村剛石氏は斯の如き傑作を少数の人に見せるのは惜しい。多くの人にも見せたいものだ。出口さんは佛典に通じて居らるゝ様である。今迄佛畫も見たが、こゝ程に佛典の意味とよく合致した畫は見た事はない。殊に筆勢と云ひ色彩と云ひ申分がない。一々紙上に躍如としてゐる點は何人も追従を許さない。又燒物の色艶と云ひ、雅致と云ひ、とても口に言ひ表はすことが出来ない。書は書法といふ點から云へば多少云ふべき所もあるが、思ふ存分何等のこだはりもなく書いてある點は全く神筆である。書法などを云々すべきではない……と一々叮嚀に拜觀し四時間餘を費された。

三月九日(第二日) 開館を待つてどしどし入場し、書畫鑑定家、軍人、學校教員、官公吏

斯道好事家、男女學生等一千七百十四名をかぞへた。何れも驚異の眼を睜つて感嘆され今までの偏見を一掃されしもの、如くであつた。

當地方にて有名な書畫鑑定家仲田甲子次郎氏及び森永敬輔氏も見え、熱心に拜觀しいづれも感嘆された。又宇城宣傳使は入場者に對し熱心に人類愛につき説明されたのは展覽會と相俟つて聽者に多大の感動を與へ、成功裡に閉會させて頂いた。(浦和分所報)

▲三月二十五日 中外日報所載記事

宗教博て

羽を擴げる大本歌

(下)

葵 イツ子

他の宗教が管長は高くに坐してその輝きを遙かに仰いで居るのに對して、大本の王仁三郎氏は典型を破つて居る。彼の寫眞では消防組の服装を見せた

り、太夫姿で淨瑠璃を語つて居るなど、何といふ軟く人に親しみかけるものであらうか。樂焼もやつて見せる、繪も描く。支那服にもなれば牧場で法被委の勞働者でもあつた。全く意表外に出たものである。

宗教家らしさを思ふ我々の觀念から、こつそり脱けて出て、民衆の一員としての勤勞振りを示して、そして宗教を擔ぎ出してゐるのは度胸が坐つて居る。

「三千世界一度に開く梅の花」と、調子のよい標語も見えた。

王仁三郎氏作品展といふところもあつた。繪畫の色彩は俗であるが、何でも描いて居る。まだお約束から離れ切らないが、それでも奇異な表情の連層はよく出来て居た。書の方はまだ、貫目が足りないし滋味や深さが出て居ない。

誰にも描かせて直ぐに焼いて居る樂焼のところは、よくやることではあるが博覽會向で可い。

眞物の鯨の、五六尺もある大きな鯨皮に紫の紐などを垂れた總裁旗は奇怪で呼物になる。趣向が可い。

何處を見ても王仁三郎氏は才氣縱横である。他の宗教の會場を見れば、淋

しくも、衣類や器物や、唯遺品などが陳列されてあつて、それは昔の人が點じて置いた法燈を、今ではまあ斯うやつて守り續けて居るとでも言つたものであるが、大本に於ては實に法燈を彌々輝かせて振り翳して踊つて居るやうである。他の会場ではまだ出揃はないが、大本では第一日からすつかり揃へてゐるのも組織的な手腕と認むべきである。

結局王仁三郎氏は、この方面のみでは無く、他のどの方面でも大いに活躍の出来る人物であつたらうと思ふ。

彼は一度法難に逢うと、もう眸は轉じて遠く海外に彷徨するその野心は、自ら驕駝を驅つてあの果ても無い砂漠に走り出て居るのである。

各宗教を陳列した、よりどり御隨意といふ形のところで、この華々しい大本教は實に獨舞臺の勝利を納めたものである。

朝夕の吾活動の真相を具さに知れる中外日報

▲三月二十五日 京都愛國新聞所載記事

岡崎の春を賑す

宗教博覽會

※畧……

第一會場の正門を入れば、右手に大本教の特設館がある。内部は大本教の眞髓である海外宣傳の情勢、大本教の沿革、大本明光社の藝術運動等何れも出口師の書畫や作品で飾られてゐる。……後略……

三月廿六日

於教主殿

天津日は霞の幕をかき分けて神苑うら、に照し給へり
 金龍の池にさゞ波たつ見えて柳のすだれ青みそめたり
 今日も亦本宮山にかけ上り檜の植替へなしにける哉
 鉄もて檜の枝を揃へつ、春日に顔を黒くやきたり
 入重野子の帯の祝ひに歸りたる宇知磨本宮山に上り來
 宇知磨に迎へられつ、裏道をあやふく教主殿に歸れり
 教主殿に家族一同産婆子と高木内事もともに列座す

鶴山に午後も上りて松檜木鉄もちて枝揃へけり
 宮のあと若き檜を植ゑこめば見まがふばかり崇嚴なりけり
 献勞者身もたなしらに働きて檜の植ゑこみはかきりにけり
 福祿壽上り來りて高知市の宣信一同をねぎらひにけり
 春の日は四つ尾の山にうすづきて黄昏近く家に歸れり
 神苑に春の陽氣のたゞよひて教主殿内暖かなるかな
 そろく、と彼岸櫻も咲き出で、暖氣は人を家より押し出す
 花はまだ天恩郷に見えねども櫻の梢春めきにけり

○作歌 夏の部 (二十首省略)

○ 宗教大博覽會大本持設館より

三月廿六日 (第十九日)

行樂気分の人足が多く、汗をかくやうな暖かさである。

今日は案外來館者が多いが丹念に見る人が少ない。従つて批評らしい批評もない。

時々『出口氏はえらい人だ、偉大な人だ』といった様な讃辭を耳にするだけである。

閉館後天聲社販賣部の模様がへの準備に取かゝる。

入場者 八一五四人。

▲ 觀客の批評

『釋迦は經文を口述したと聞いてゐます。出口氏は靈界物語を口述される。——同じことですな。出口氏は釋迦のあらはれぢやないかと私は思ひますが』——といった人があつた。

三月廿七日

於 高天閣

朝晴れの神苑に匂ふ梅の香の袖に潜みて清しさの湧く

家鶏の聲長閑に御代の春唄ふあしたの空にかすむ鶴山

龜岡に下らんとして朝八時祥雲閣にしばし立よる

次郎氏の病床見舞ひ待たせたる自動車はせて停車場に向ふ

一行は閑月足立高木夫人外七八名にて龜地向へり

一本木踏切りに立ち宣信徒吾行く汽車を見送る朝かな

ハンカチーフ振りて掬水莊の庭に四五人立ちて見送りなしをり

明光社月並和歌の雜詠を一千首程車上に選む
入木驛に吾汽車つきて漸くに和歌の一選終りけるかな
龜岡の驛に一行下車なして信徒出迎ふ中を歸郷す
鐵外氏頼みて大本沿革畫十枚表具師に届けたりけり
彌勒殿懸額昨日より組立のため京都より參綾を爲す
龜岡に歸る間もなく面會者二百數十有人ありたり
齋藤氏結婚式に列すべく澄月伴ひ自動車馳せたり
久々に訪ね來たりし大石翁と同車しながら穴太に向ひぬ
齋藤家親族數多より集ひ今日の慶事を歡こび合へり

咲き残る庭の紅梅そほ降れる雨に散りゆく風情床しも
苔の生す庭のおもてに春の雨ふりそ、ぎつ、木の葉さ、やく
紅々と万兩の實の熟れし上に雨そほちつ、微風わたる
數十年逢はざる人に巡り合ひて懷舊談に時移しけり
春雨のそほふる里の穴太にて今日半日を送るべきかな
村上氏病床を訪ひ吾心能ふ限りのねぎらひせしかな
故里の母は吾の歸れりと聞きて態々出迎へましけり
齋藤家婚禮の席の床の間に坐を勤められ尻こそばゆし
婚禮の舉式終りて龜岡の宴席正月亭に馳せ行く

六臺の自動車連ね穴太より龜岡さして夕べ歸れり
 好まざる酒を強ひられ酔ひしれて近侍に助けられ車にて歸る
 何んもなく苦しきまゝに高殿を立ち出で明光殿に眠りぬ
 淨瑠璃や下らぬ歌なぞ唄ひつゝ三更過ぎて漸く就眠す
 四十餘年遇はず有りける同窓の友にも逢ひし今日の嬉しさ
 約四十年の星霜逢はざりし山田義一といへる知己に逢ふ

○
 今日の結婚につき扇面に書きし歌

△新夫大次郎氏へ

千代までと契る言葉も口籠る鴛鴦のふすまの新枕かな

△全嚴父與四郎氏へ

千代八千代榮え盡きざる今日の日の春のよろこび巖の如くに

△全母堂蘭子夫人へ

萬代の榮え果てなき吾家に今日咲き初めし春の花嫁

○

茅花ぬく乙女の袖に風立ちて尾の上の霞片寄りけり
 春がすみ晴れ行く峰の尾白々と櫻の花に匂ふ風の香
 櫻の雨かすめる空に風立ちてちりゆく花に悟る世のさま
 二三寸伸びたる畑の麥の生を揺すりて行けり春の山風
 山櫻咲き出でしより大方の春來にけらし心地するかも

心なき人のわざにや咲きほこるさくららの幹に馬つなぎをり
 黒髪に風そよぎつゝ花の香は寢屋の窓より吹き入る夕暮
 山櫻花の葉間に柔かき舌はみ出せり薄紅にして
 足もとにまつばる犬を抱き上げし膝に茶色の毛のつく寂しさ
 春彼岸過ぎて五日の後の今日初めて見たり今年の櫻を
 遅梅の花真盛りの其中に彼岸櫻交りて咲けり
 小雀の聲も長閑に花匂ふ春待ち佗びて囀づる神苑

○宗教大博覽會大本持設館より

三月廿七日 (第二十回)

雲の多い朝である。

大連磨像の大幅が到着した。明日聖師様御來館を待つて大本館入口正面の山越ミロク像と

取替へる筈である。大谷光瑞氏來館。

三雲暉江、小龜ため子兩氏の手にて館内の生花が全部取替へられ、御神座の梅は櫻に替つた
 午後三時頃から大雨が沛然として降り出した。おかげで樂燒は大繁昌で、吟月、如月、兩
 女史は息を吐く暇もない。

書籍販賣部が模倣替へして右の壁の中央に聖師様の御肖像畫を掲げ、それを中心に靈界物
 語や日月日記その他の書籍がならべられ、月の光の氣持がよく現はれてゐる。又左の壁には
 『大本の話』を切抜き電氣照明にて廣告し、更新の氣に満たされてゐる。

入場者總數七八六〇人

▲觀客の批評

魚屋のお婆さんだと云ふ人が御筆先の御眞筆を見て

『他人はこの字を折れ釘流とか、なんとか云ふかも知れぬが、自分にはこの位貴重なもの
 はない』

と言つて感心してゐた。

○ 九重の花の都の春の日の花に風情を添ふる宗博
大本館 宗 教 博 を 背 負 つ て 立 ち

三月廿八日 於高天閣

今日こそは宗教博に行かむとて朝未明より起きてさわぎぬ
穴太より上田氏姉妹朝來り八時同車し宗博に向ふ

暖かき今朝の龜岡停車場は吾を見送る人の多きも
玉敷の都をさして上り行く汽車の窓邊に映ゆる龜城趾
山本に車進めばせゝらぎの音高くさびしく溪川
二條驛下れば粟辻中村氏自動車雇ひて吾行待ち居り
自動車を二臺つらねて京都市南北に割り宗博に入る
何時見ても大本館の情況は一入春の輝きありけり
大本館一巡すれば観覧者目引き袖曳き吾を指さす
樂燒の茶碗に書畫などかきつけて興を添へたり今日の會場
河原町鎌光邸に招かれて晝食しこたま養應されたり

事務室に少時休らひ筆執りて五十有餘首歌作りけり
 宗教館今日も巡りて鬼殿と今日も握手を交しけるかな
 午後七時二十四分二條驛のり込み天恩郷に歸りぬ
 東京に上りてありし御田村主事今日天恩郷に歸れり
 明月氏介して龜井靈媒に觀音の書を興へけるかな
 小夜更けて雨止みたれど星影の一つも見えず淋しさの湧く

○作歌 春興の部 (二十三首省略)

宗教博大本館の出口には極樂燒の窯をたぎらす

終日をあつき心のわきたちて樂燒姫のいさましきかな
 宗教博地獄館内みしあまに極樂燒をするぞ樂しき

○山元春汀氏へ

あし引の山元櫻さきそめて風にをふなり春の汀も

○長谷川八重子氏へ

山姫の袖あらひしか長谷川の流れしからん八重櫻花

○作歌 (二十二首省略)

○詩歌 詠草

清貧に甘んずるなぞと今までにぼこりし吾身の負け惜しみ可笑し

清貧の君子氣取つて泰然と装ひみれど心がぶかつく世の中が良く買ひ被り又悪く買ひ被ぶつてゐる私の生活理解なき婆娑などに神の如崇敬されても有難くない歴史畫に趣味持ちてより京に出てすゝけた古本買った安もの宗教博に名を知られてる人造鬼と地獄の口で握手した王仁玉敷の都の春の宗教博は概して古畫展覽會の感じだ一年に一度の春の花見さへ碌々出来ない惱ましき生活今年こそ一切を捨て思ひ切り嵐の山の櫻をたづねた同人に選まれた歌人が今日よりは肩の荷が重くなつたと云つてました毀たれし宮の古材利用して建てし住家の氣に懸るかな生活難などと云つてゐる人々のその大方は生存難のみ是と云ふ生甲斐のある事もせずに生活難も有つたものかい

生活は實に容易な業でないけれど生存だけはして居る何かしら氣分が悪くない夢見たら朝から昔の馴染が訪ひ來た四十年そのかみ親しかつた人顔面なれどやはりなつかし若かりし時の馴染とつまづいた石は必ずふりかへり見るお互に色も香もなき身ながらに昔思へば心わかやぐ今昔の感じいよ／＼深きかな彼は町家へ吾は大道に若き時見し故郷の山々をいま見る目にはいと小さき

○宗教大博覽會大本特設館より

三月廿八日 (第二十一日)

雨でうつとらしい。午前九時聖師様御來館館内御一巡後控室にて休憩、短冊を染筆なされ

入口の樹木を植替へる。聖師様午後一時住之江支部へお越し。再び御來館短冊の染筆を續けられ、其後種々御話があつた。雨のせいかな樂焼が繁昌すること素晴らしいものだ。閉館する前から入口大輻の掛替へが初められ『大連磨像』が掛けられた。『素適だね』と來館者の一人が呟く。その前へ御使用の大筆をたて、人目をよせる。

聖師様は午後七時二十四分二條發列車にて龜岡へ御歸りになつた、雨は益々激しくなる。次の話は一寸面白いので筆を加へておく。

去る廿五日から宗博の開會期中、二條驛と博覽會場との間を乗合自動車が開通した。恰度その開通の廣告ピラを作るのに大本館の屋根にある月をマークとして印刷したとか。

大本の博覽會だと世上が評する折柄以上の話は面白いと思ふ。

入場者總數 五三〇〇人

▲觀客の批評

帝大の一學生の話、

『宗教は大嫌ひだが出口氏は大好きです。出口氏の様な人物が現代に現はれたことを私は嬉しく思ひます』と語つた。かうした言葉はチヨイ／＼耳にする。

三月廿九日

於 高天閣

辛酉の大本事件の其日より三三三三日の今朝かな
龜岡の町の櫻は咲き初めて高天閣の眺め佳きかな
穴太より上田道子氏訪ひ來り民子の禮狀携へ示せり